

四街道市館ノ山遺跡(2)

— 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XV —

平成25年9月

独立行政法人 都市再生機構

公益財団法人 千葉県教育振興財団

よつ かい どう たて の やま
四街道市館ノ山遺跡(2)

— 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XV —



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第718集として、独立行政法人都市再生機構による物井地区土地区画整理事業に伴って実施した四街道市館ノ山遺跡の2冊目の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、中世の館跡について、新たな知見を得ることができ、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られています。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係機関、また、発掘作業から整理作業まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成25年9月

公益財団法人 千葉県教育振興財団

理事長 錦織 總夫

凡　例

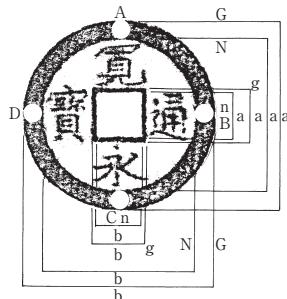
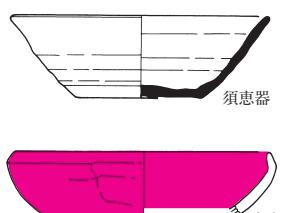
1. 本書は、独立行政法人都市再生機構による物井地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書に収録した遺跡は、千葉県四街道市物井字館ノ山 678-1 ほかに位置する館ノ山遺跡（遺跡コード 228-020）の（4）・（5）地点である。
3. 発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
4. 発掘調査および整理作業の期間、担当者は第1章に記載した。
5. 本書の執筆は、第1章・第3章を主任上席文化財主事部 淳一、その他の部分は主任主事大岩桂子が担当した。編集は大岩と主任上席文化財主事山口典子が行った。
6. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、四街道市教育委員会、独立行政法人都市再生機構の御指導・御協力を得た。
7. 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第1図 国土地理院発行 1/50,000 地形図 「成田」(NI-54-19-10-3)・「東金」(NI-54-19-11-4)・
「佐倉」(NI-54-19-14)・「千葉」(NI-54-19-15) を合成使用

第7図 物井地区館ノ山遺跡地形測量図（平成11年房総測量株式会社に測量委託）

上記以外は、住宅・都市整備公団（当時）による物井地区現況図

8. 図版1の遺跡周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和44年撮影のものを使用した。
9. 本書で使用した座標は、日本測地系に基づく平面直角座標（国家標準直角座標第IX系）で、図面の方位は、全て座標北を示す。
10. 図や記号の用例は、以下のとおりである。



※錢貨の各測定点については以下のとおり。

$$\text{外貨外径 } G = \frac{G_a + G_b}{2}$$

$$\text{外貨内径 } N = \frac{N_a + N_b}{2}$$

$$\text{内郭外径 } g = \frac{g_a + g_b}{2}$$

$$\text{内郭内径 } n = \frac{n_a + n_b}{2}$$

$$\text{外縁厚 } T = \frac{A + B + C + D}{4}$$

本文目次

| | |
|---------------|----|
| 第1章 はじめに | 1 |
| 第1節 調査の概要 | 1 |
| 1 調査の経緯と経過 | 1 |
| 2 調査・整理の方法 | 4 |
| 第2節 遺跡の位置と環境 | 5 |
| 1 遺跡の位置と地形 | 5 |
| 2 周辺の遺跡 | 6 |
| 第2章 遺構と遺物 | 15 |
| 第1節 古墳時代 | 15 |
| 第2節 平安時代 | 15 |
| 第3節 中世 | 17 |
| 1 台地整形区画・溝状遺構 | 17 |
| 2 柵列 | 22 |
| 3 方形堅穴状遺構 | 22 |
| 4 掘立柱建物 | 22 |
| 5 井戸状遺構 | 28 |
| 6 地下式坑 | 30 |
| 第4節 その他の遺構と遺物 | 32 |
| 1 遺構 | 32 |
| 2 遺物 | 37 |
| 第3章 まとめ | 41 |

表 目 次

| | | | |
|---------------------|----|-----------|----|
| 第1表 周辺の遺跡 | 3 | 第4表 土器観察表 | 39 |
| 第2表 館ノ山遺跡（4）時代別遺構一覧 | 3 | 第5表 錢貨計測表 | 40 |
| 第3表 土坑等計測表 | 18 | | |

挿図目次

| | | | |
|--------------------------------|----|----------------------------------|----|
| 第1図 館ノ山遺跡の位置と周辺の遺跡 | 2 | 第13図 SD-025、SA-001、SI-158、SK-373 | 23 |
| 第2図 館ノ山遺跡（4）・（5）の位置と 上層調査範囲 | 4 | 第14図 SB-007・008 | 24 |
| 第3図 グリッド呼称法 | 4 | 第15図 SB-009・011 | 25 |
| 第4図 物井地区遺跡分布図 | 7 | 第16図 SB-010・012・015 | 26 |
| 第5図 館ノ山遺跡周辺の地形 | 9 | 第17図 SB-013・014 | 27 |
| 第6図 館ノ山遺跡（4）遺構分布図 | 10 | 第18図 SK-363・364・369 | 29 |
| 第7図 館ノ山遺跡中～近世の遺構全体図 | 11 | 第19図 SK-384・402・406・407 | 31 |
| 第8図 SI-159・160 | 16 | 第20図 土坑（1） | 33 |
| 第9図 台地整形区画 | 18 | 第21図 土坑（2） | 34 |
| 第10図 SD-020 | 19 | 第22図 土坑（3） | 36 |
| 第11図 SD-021・023、SD-022 | 20 | 第23図 出土遺物（1） | 38 |
| 第12図 SD-024・026 | 21 | 第24図 出土遺物（2） | 40 |
| | | 第25図 館ノ山遺跡中～近世の遺構図 | 43 |

図版目次

| | |
|---|--|
| 図版1 遺跡周辺航空写真（約1/10,000 昭和44年撮影） | 図版7 SK-377・380～383・385・387～390 |
| 図版2 遺跡全景、遺跡近景 | 図版8 SK-391・393～395・397～399・401～403 |
| 図版3 SI-159・160、H台地整形区画、I台地整 形区画 | 図版9 SK-363・364・368・369・373・384・406・ 407 |
| 図版4 J台地整形区画、SD-020～025 | 図版10 SK-404・405・408～410、館ノ山遺跡（4） 北東部、館ノ山遺跡（5）確認調査状況（上層） |
| 図版5 SD-026、SB-007～009・011・012・015、 H台地整形区画、SI-158、SK-371 | 図版11 出土遺物 |
| 図版6 SK-365・367・370・372・374・375A・B・ 376・400・407 | |

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

独立行政法人都市再生機構が実施する千葉県四街道市物井地区土地区画整理事業の事業地内には、多くの埋蔵文化財が所在する。その取扱いについては、千葉県教育委員会の指導のもとに、一部の現状保存地域を除き、記録保存の措置が講じられることになり、公益財団法人千葉県教育振興財団が昭和59年度から調査を実施し、調査成果として平成24年度までに13冊の報告書を刊行している¹⁾。

館ノ山遺跡の発掘調査は平成9年度から平成11年度、平成23年度に行われ、平成9年度から平成11年度の調査成果は、『四街道市館ノ山遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書IX－』として平成23年度に刊行した。本書は平成23年度の調査についての報告書である。

平成23年度の調査対象地は2か所に分かれ、館ノ山遺跡(4)・(5)とした。発掘調査の期間、担当者などは以下のとおりである。

| | | |
|----------------------------------|----------|--|
| 平成23年度 | 調査研究部長 | 及川淳一 |
| | 北部調査事務所長 | 野口行雄 |
| (4) | 調査期間 | 平成23年7月5日～平成23年11月4日 |
| | 調査面積 | (規模) 997m ² (確認調査) 上層 997m ² / 997m ² ・下層 0 m ² / 997m ² (本調査) 上層 997m ² ・下層 0 m ² |
| | 調査担当者 | 矢本節朗 |
| (5) | 調査期間 | 平成23年11月7日～平成23年11月18日 |
| | 調査面積 | (規模) 656m ² (確認調査) 上層 269m ² / 656m ² ・下層 0 m ² / 656m ² (本調査) 上層 0 m ² ・下層 0 m ² |
| | 調査担当者 | 矢本節朗 |
| 整理作業は、平成24年度を行い、平成25年度に報告書を刊行した。 | | |
| 平成24年度 | 調査研究部長 | 関口達彦 |
| | 整理課長 | 高田 博 |
| | 整理期間 | 平成25年1月4日～平成25年3月31日 |
| | 整理内容 | 記録整理～編集の一部 |
| | 整理担当者 | 蔀 淳一、大岩桂子 |
| 平成25年度 | 調査研究部長 | 伊藤智樹 |
| | 整理課長 | 今泉 潔 |
| | 整理期間 | 平成25年5月1日～平成25年5月31日 |
| | 整理内容 | 編集の一部～印刷・報告書刊行 |
| | 整理担当者 | 山口典子 |



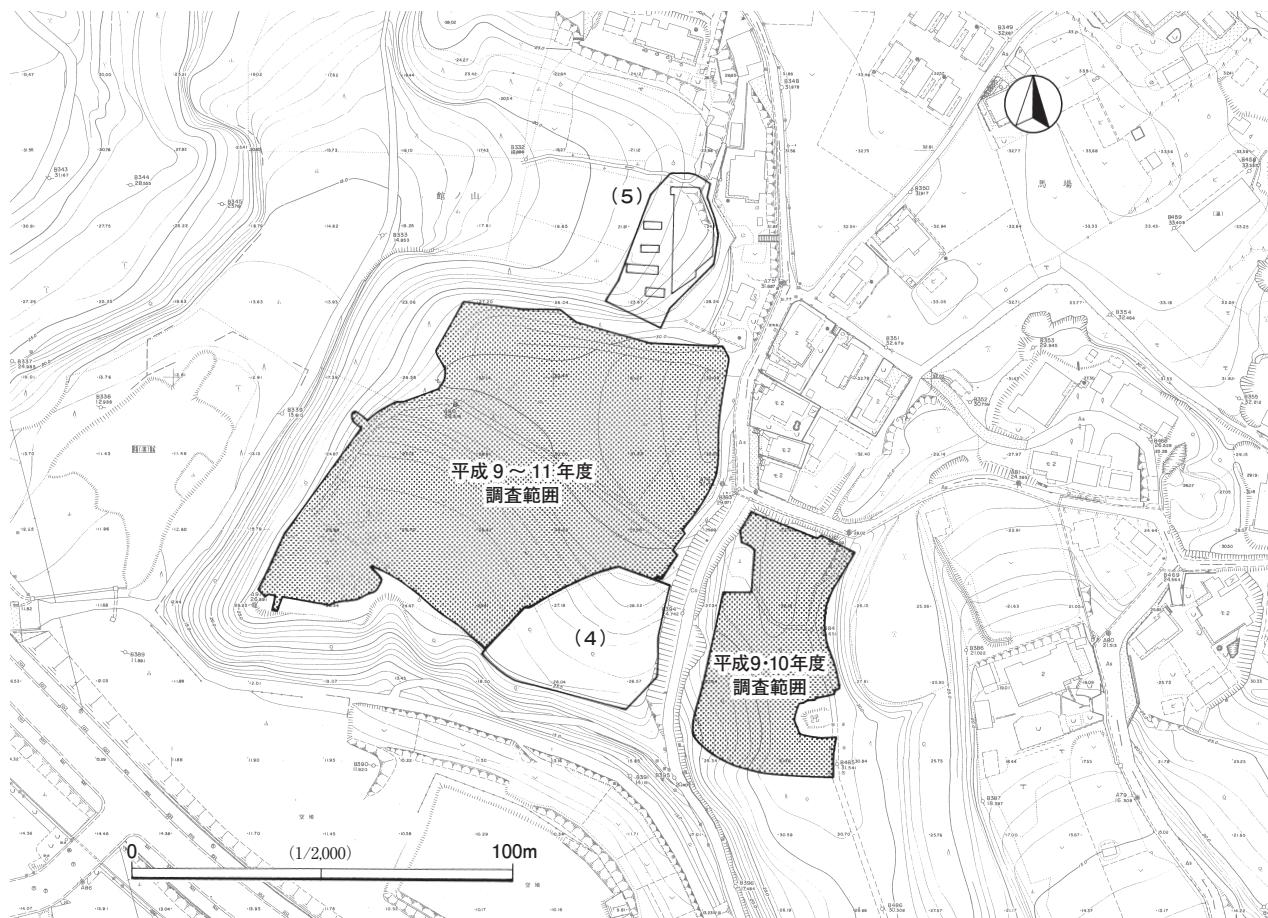
第1図 館ノ山遺跡の位置と周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡

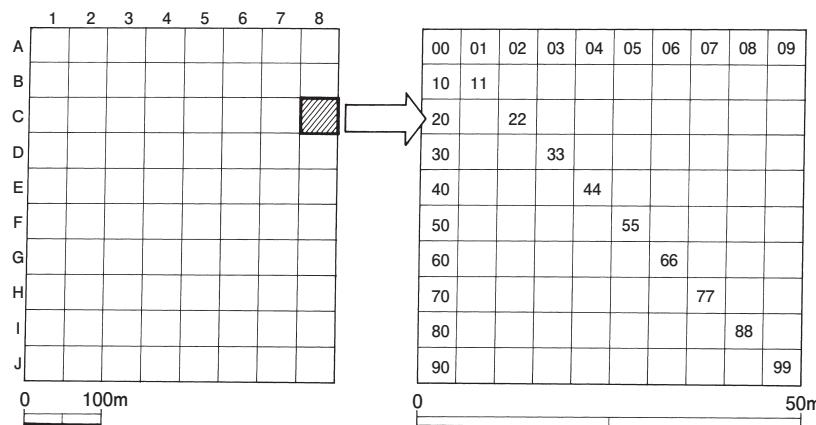
| No. | 遺跡名 | No. | 遺跡名 | No. | 遺跡名 | No. | 遺跡名 |
|-----|-------------|-----|--------|-----|---------|-----|----------|
| 1 | 館ノ山遺跡 | 21 | 飯郷作遺跡 | 41 | 小竹城 | 61 | 高岡砦 |
| 2 | 北ノ作遺跡 | 22 | 駒込遺跡 | 42 | 洲崎砦 | 62 | 時崎城 |
| 3 | 古屋城跡 | 23 | 油作第2遺跡 | 43 | 仲台砦 | 63 | 石川館 |
| 4 | 入ノ台第2遺跡 | 24 | 油作第1遺跡 | 44 | 臼井城 | 64 | 高崎的場遺跡 |
| 5 | 千代田遺跡V区 | 25 | 大山砦 | 45 | 臼井城御屋敷 | 65 | 城城 |
| 6 | 千代田遺跡I区 | 26 | 池ノ尻館 | 46 | 田久里砦 | 66 | 金部田城 |
| 7 | 池花古墳群 | 27 | 鹿渡城 | 47 | 臼井田宿内砦 | 67 | 太田要害城 |
| 8 | 千代田古墳群 | 28 | 東作砦 | 48 | 稻荷台砦 | 68 | 大篠塚城 |
| 9 | 清水・新久・出口古墳群 | 29 | 和良比堀込城 | 49 | 謙信一夜城 | 69 | 小篠塚城 |
| 10 | 御山古墳群 | 30 | 殿台館 | 50 | 忍台城 | 70 | 神門城ノ内城 |
| 11 | 鶴口遺跡 | 31 | 東向井城 | 51 | 志津大口館 | 71 | 馬渡大内城 |
| 12 | 太田・大篠塚遺跡 | 32 | 中野戸崎砦 | 52 | 上峠城 | 72 | 馬渡館 |
| 13 | 岩富遺跡群 | 33 | 中台城 | 53 | 生谷館 | 73 | 馬渡馬場館 |
| 14 | 岩富明代台西遺跡 | 34 | 作遺跡 | 54 | 生谷砦 | 74 | 坂戸馬場館 |
| 15 | 岩富漆谷津遺跡 | 35 | 妙見砦 | 55 | 臼井屋敷 | 75 | 坂戸尾牛城 |
| 16 | 権現堂遺跡 | 36 | 元堀城 | 56 | 吉見城 | 76 | 岩富城 |
| 17 | 郷野遺跡 | 37 | 中山城 | 57 | 岩名姿山砦 | 77 | 原屋敷 |
| 18 | 六崎大崎台遺跡 | 38 | 福星寺館跡 | 58 | 下山砦 | 78 | 堀之内城 |
| 19 | 高岡遺跡群 | 39 | 木出城 | 59 | 佐倉(鹿島)城 | 79 | 馬場No.1遺跡 |
| 20 | 江原台遺跡 | 40 | 大原館 | 60 | 長勝寺脇館跡 | | |

第2表 館ノ山遺跡(4) 時代別遺構一覧

| 時代 | 遺跡名 | 遺構番号 | 遺構数 |
|--------|---------|---|-----|
| 古墳時代 | 竪穴住居 | SI-159 | 1 |
| 平安時代 | 竪穴住居 | SI-160 | 1 |
| 中~近世ほか | 台地整形区画 | H、I、J | 3 |
| | 溝状遺構 | SD-020、SD-021・023、SD-022、SD-024、SD-025、SD-026 | 6 |
| | 柵列 | SA-001 (P-486 ~ 488・495・496) | 1 |
| | 掘立柱建物 | SB-007 (P-384 ~ 387・448・450・451)、SB-008 (P-473 ~ 477・479 ~ 482・500、SX-027)、SB-009 (P-350 ~ 353・357 ~ 359・361・362・364・365・369・371・375・378・388)、SB-010 (P-368・372・389 ~ 397・400)、SB-011 (P-354 ~ 356・359・361・362・375・392・404 ~ 406)、SB-012 (P-340・344・367・444)、SB-013 (P-339・417・432・439)、SB-014 (P-416・426・437・464・469・471)、SB-015 (P-338・339・343・346・434) | 9 |
| | 方形竪穴状遺構 | SK-373 (P-414・415)、SI-158 (P-452・453) | 2 |
| | 井戸状遺構 | SK-363、SK-364、SK-369 | 3 |
| | 地下式坑 | SK-384、SK-402、SK-406、SK-407 | 4 |
| | 土坑 | SK-365 ~ SK-368、SK-370 ~ SK-372、SK-374 ~ SK-377、SK-380 ~ SK-383、SK-385 ~ SK-391、SK-393 ~ SK-401、SK-403 ~ SK-405、SK-408 ~ SK-411、SK-413、SK-414 | 41 |
| | その他 | SX-022、SX-023、SX-024、SX-025、SX-026 | 5 |
| | 小穴 | P-324 ~ 337・342・347 ~ 349・360・363・366・370・373・374・376・377・379 ~ 383・398・399・401 ~ 403・407・408・410・413・418 ~ 425・427 ~ 431・433・435・436・438・440 ~ 443・445 ~ 447・449・454 ~ 462・465 ~ 468・470・472・478・483 ~ 485・489 ~ 494・497 ~ 499・502 ~ 511 | 98 |
| 欠番 | | SK-378、SK-379、SK-392、SK-412、P-460、P-473 | 6 |



第2図 館ノ山遺跡(4)・(5)の位置と上層調査範囲



第3図 グリッド呼称法

2 調査・整理の方法（第1・2表、第1～3図）

物井地区では、事業範囲全域を公共座標（旧座標・国家標準直角座標第IX系）に基づく方眼網で覆つて調査を行っている。方眼は50m×50mの区画を大グリッドとし、名称は方眼網の北西角を起点にして東へ1・2…、南へA・B…として、26Uのように両者を組み合わせて大グリッドの名称としている。大グリッドの区画線の公共座標値（旧座標系）は、第7図に示すとおりである。館ノ山遺跡の範囲は大グリッドの24～27列、S～U行となる。

大グリッドは、 $5\text{ m} \times 5\text{ m}$ の100個の小グリッドに分割され、その名称は大グリッドの北西隅の00を起点に東へ01・02…、南へ10・20…として、南東隅が99となる。これを大グリッドの名称と組み合わせて26U-13のように表記し、遺構・遺物の位置は、この方眼網に基づいて記録した。遺構・遺物の標高は、東京湾平均海面（T.P.）からの海拔高で記録した。

館ノ山遺跡は、南北に横切る道路によって東・西に分かれるが、その西側区域の南東隅が（4）の調査範囲となる。当初の対象面積は944m²で、上層について全面の確認調査を行ったところ、縄文時代・古墳時代・中世の遺構が多数存在することが明らかとなり、全域を本調査することになった。その後、事業者からの要望により、調査対象範囲は予定区域の西側も含めることになり、997m²の上層本調査を実施した。上層の調査の結果、中世の台地整形工事のために関東ローム層が削平されていることがわかり、下層については、調査を実施しなかった。

（5）の調査範囲は、西側の区域の北東隅に当たる谷頭部の斜面で、対象面積は656m²である。まず上層について、谷頭である東側は面的に、そこから下る西側は間隔をあけてトレンチを入れ、合計269m²の確認調査を行った。その結果、上層は谷頭部に古墳時代の遺物が集中する様子は見られたものの遺構が検出されなかっただため、確認調査で調査を終了した。下層は関東ローム層が存在しなかったため、調査を実施しなかった。

遺構番号は、001から始まる3桁の数字で、その前に種別を表す略号を付けた。種別略号は、竪穴住居・方形竪穴状遺構がSI、掘立柱建物がSB、溝状遺構・道路状遺構がSD、柵列がSA、土坑・土坑墓・地下式坑・井戸などがSK、その他の種別がSX、小穴がPである。遺構を検出した館ノ山遺跡（4）の調査では、平成9年度～平成11年度の調査で使用された番号に連続するかたちで付けることにし、SI-159～、SB-007～、SD-20～、SK-373～、SX-022～、P-324～、台地整形区画H～となる。館ノ山遺跡（4）の時期ごとの遺構の種別と番号の詳細は、第2表に記載するとおりである。

遺物への注記は、市町村コード、遺跡コード、遺構番号、遺物台帳に記載された遺物番号の順で書き込んだ。グリッドをもとに取り上げた遺物は、グリッド名を記載している。注記が不可能、または好ましくない遺物については、袋詰めして注記と同様のデータを記したラベルを付けた。

第2節 遺跡の位置と環境（第4～7図）

1 遺跡の位置と地形

館ノ山遺跡は、千葉県四街道市物井字館ノ山に所在する。四街道市は、千葉県の北西部に位置し、北側が佐倉市、南側が千葉市と接する。物井地区は、四街道市の北東部にあたる台地上に広がり、東側を流れる鹿島川に面し、西側は、手縫川の最上流部にあたる。一帯の台地は、鹿島川に注ぐ樹枝状の谷津によって浸食されて、複雑に入り組んだ地形となっている。標高は30m前後である。

館ノ山遺跡は、物井地区の南東部に位置し、鹿島川本流が形成した幅700m前後の低地から谷津を200mほど入った台地上に立地する。台地は、谷津が東・南・西の三方をめぐり、北から南に向かって突き出す。谷津を挟んで東側が嶋越遺跡で、西側が小屋ノ内遺跡である。遺跡南側の低地は、千葉市との境界付近を水源とする小名木川の鹿島川への合流点である。

館ノ山遺跡が立地する台地は、北東の幅のせまい尾根で大きな台地とつながる島状となっており、館ノ山の地名の由来である中世城館が造られたのにふさわしい。尾根に近い北東側の標高が最も高くて32m

ほどで、そこから東側の区域では南東方向に、西側の区域では南西方向に緩く傾斜している。その範囲は、東側の区域で長さ 100 m、幅 30 m ほどであり、標高 29 m 付近から下は傾斜が急になる。西側の区域では長さ 100 m、幅 100 m ほどで、標高 25 m 付近から下は傾斜が急になる。

現状の地形は、上記のようであるが、後で述べるように、本来の地形ではなく、中世における台地整形などで改変されていると考えられる。

2 周辺の遺跡

物井地区の事業地内の遺跡のこれまでの調査成果の概要は、以下のとおりである。北側の遺跡から示す¹⁾。

中久喜遺跡 主な遺構は、縄文時代炉穴 3 基、弥生時代末～古墳時代前期竪穴住居 5 軒である。台地先端の調査で、西側に続く事業地外に、大集落の存在が想定されている。

北ノ作遺跡 主な遺構は、旧石器時代石器集中（V 層）1 か所、縄文時代陥穴 3 基、弥生時代末～古墳時代前期竪穴住居 32 軒、古墳時代後期竪穴住居 3 軒、奈良・平安時代竪穴住居 11 軒、掘立柱建物 4 棟、中世城郭である。

古屋城跡 整理中で、主な遺構は、縄文時代土坑 12 基、古墳時代竪穴住居 1 軒、奈良・平安時代竪穴住居 4 軒、中世掘立柱建物 1 棟、腰曲輪 1 面、柵列 1 条、台地整形 5 か所である。

郷遺跡 主な遺構は、古墳時代後期竪穴住居 5 軒、奈良・平安時代竪穴住居 17 軒、奈良・平安時代～中～近世水場遺構 1 か所、中～近世掘立柱建物 1 棟、地下式坑 2 基である。

稻荷塚遺跡 主な遺構は、旧石器時代石器集中（V 層 2、VII 層 4、IX 層 2）8 か所、縄文時代炉穴 9 基、陥穴 18 基、縄文時代前期竪穴住居 4 軒、弥生時代後期竪穴住居 1 軒、弥生時代末～古墳時代前期竪穴住居 1 軒、古墳時代後期竪穴住居 11 軒、円墳 2 基、奈良・平安時代竪穴住居 229 軒、掘立柱建物 53 棟、柵列 2 条、中～近世土坑墓 7 基、塚 3 基、溝状遺構 34 条である。

御山遺跡 報告済みの主な遺構は、旧石器時代石器集中（III 層 7、IV～V 層 7、VI 層 1、VII 層 4、IXa 層 1、IXc 層 3、X 層上部 2、X 層下部 1）26 か所、縄文時代陥穴 4 基、縄文時代晩期土坑墓 1 基、縄文時代晩期～弥生時代中期土器集中 1 か所、弥生時代後期竪穴住居 3 軒、円墳 7 基、方墳 13 基、古墳時代以降土坑墓 5 基、溝状遺構 13 条である。

その後の調査で、旧石器時代石器集中 1 か所、縄文時代陥穴 3 基、炉穴 3 基、縄文時代遺物包含層 3 か所、円墳 1 基、方墳 2 基、方形周溝 1 基、奈良・平安時代方形周溝 16 基、円形周溝 1 基、火葬墓 2 基、中世土坑 41 基、溝 18 条、台地整形区画 1 か所、近世寺院（金剛寺）跡、土坑墓 14 基、火葬墓 1 基、柵列 2 条、溝状遺構 2 条、陶磁器廃棄場 1 か所を検出した。

清水遺跡 報告済みの主な遺構は、旧石器時代石器集中（III 層 1、IV 層 2、IV～V 層 6、VII～IXa 層 14、IXc～Xa 層 3）26 か所、縄文時代陥穴 11 基、古墳（円墳・前方後円墳）17 基、奈良・平安時代土坑墓 1 基である。

その後の調査で、前方後円墳 1 基、円墳 2 基、土坑墓 3 基を検出した。

新久遺跡 主な遺構は、旧石器時代石器集中（III 層 2、IV～V 層 1、VI 層 3、VII～IXa 層 4、IXc～Xa 層 1）11 か所、縄文時代陥穴 13 基、弥生時代後期竪穴住居 18 軒、古墳（円墳・前方後円墳）5 基、方形周溝 1 基、土坑墓 2 基である。

出口遺跡 報告済みの主な遺構は、縄文時代陥穴 3 基、縄文時代早期竪穴住居 1 軒、古墳（円墳・前方後



第4図 物井地区遺跡分布図

円墳) 13 基、奈良・平安時代方形周溝 3 基、土坑墓 4 基、中世カワラケ埋納土坑 1 基である。

その後の調査で、縄文時代陥穴 1 基、中～近世溝 1 条を検出した。旧石器時代石器集中 8 か所は整理中である。

高堀遺跡 検出したのは、旧石器時代石器集中（Ⅶ層～Ⅸ層）2 か所、縄文時代陥穴 1 基、竪穴状遺構 1 基である。

出口・鐘塚遺跡 報告済みの主な遺構は、旧石器時代石器集中（Ⅲ層～Ⅳ層上部 3、Ⅳ層下部 1、Ⅵ層 2、Ⅶ層 3、Ⅸ層 14）23 か所、縄文時代陥穴 3 基、円墳 1 基、奈良・平安時代方形周溝 6 基である。

その後の調査で、旧石器時代石器集中 3 か所、縄文時代陥穴 1 基、中世道路状遺構 1 条、溝状遺構 1 条を検出した。

棒山・呼戸遺跡 検出した主な遺構は、旧石器時代石器集中 18 か所、縄文時代炉穴群 23 か所、縄文時代土坑 20 基、古墳時代後期竪穴住居 1 軒、方墳 2 基、古墳時代土坑 1 基、溝状遺構 21 条、井戸状遺構 3 基、土坑 134 基で、整理中である。

小屋ノ内遺跡 主な遺構は、旧石器時代石器集中（Ⅲ層下部～Ⅴ層 15、Ⅶ層～Ⅸ層上部 6、Ⅸ層 14）35 か所、縄文時代炉穴 22 基、陥穴 16 基、縄文時代中期竪穴住居 1 軒、縄文時代遺物集中（早期 2、後期後半 1）3 地点、弥生時代後期壺棺墓 1 基、弥生時代後期～古墳時代前期竪穴住居 35 軒、古墳時代中期竪穴住居 7、小鍛冶工房 1 軒、古墳時代後期竪穴住居 11 軒、円墳 6 基、方墳 1 基、奈良・平安時代竪穴住居 273 軒、掘立柱建物 136 棟、土坑墓 4 基、柵列 1 条、中～近世土坑墓 10 基、地下式坑 3 基、井戸状遺構 7 基、台地整形区画 5 か所、溝状・道路状遺構 67 条、土坑 423 基、小穴 855 基である。台地整形区画は、近世主体である

嶋越遺跡 整理中で、縄文時代早期～晩期遺物包含層 3 か所、縄文時代後期竪穴住居 1 軒、弥生時代後期竪穴住居 1 軒、奈良・平安時代竪穴住居 31 軒、中世地下式坑、土坑、井戸状遺構、台地整形区画などを検出した。また、事業地外で（財）印旛郡市文化財センターが行った調査では、縄文時代早期～晩期の遺物包含層と古墳時代後期の竪穴住居 1 軒が検出されている²⁾。

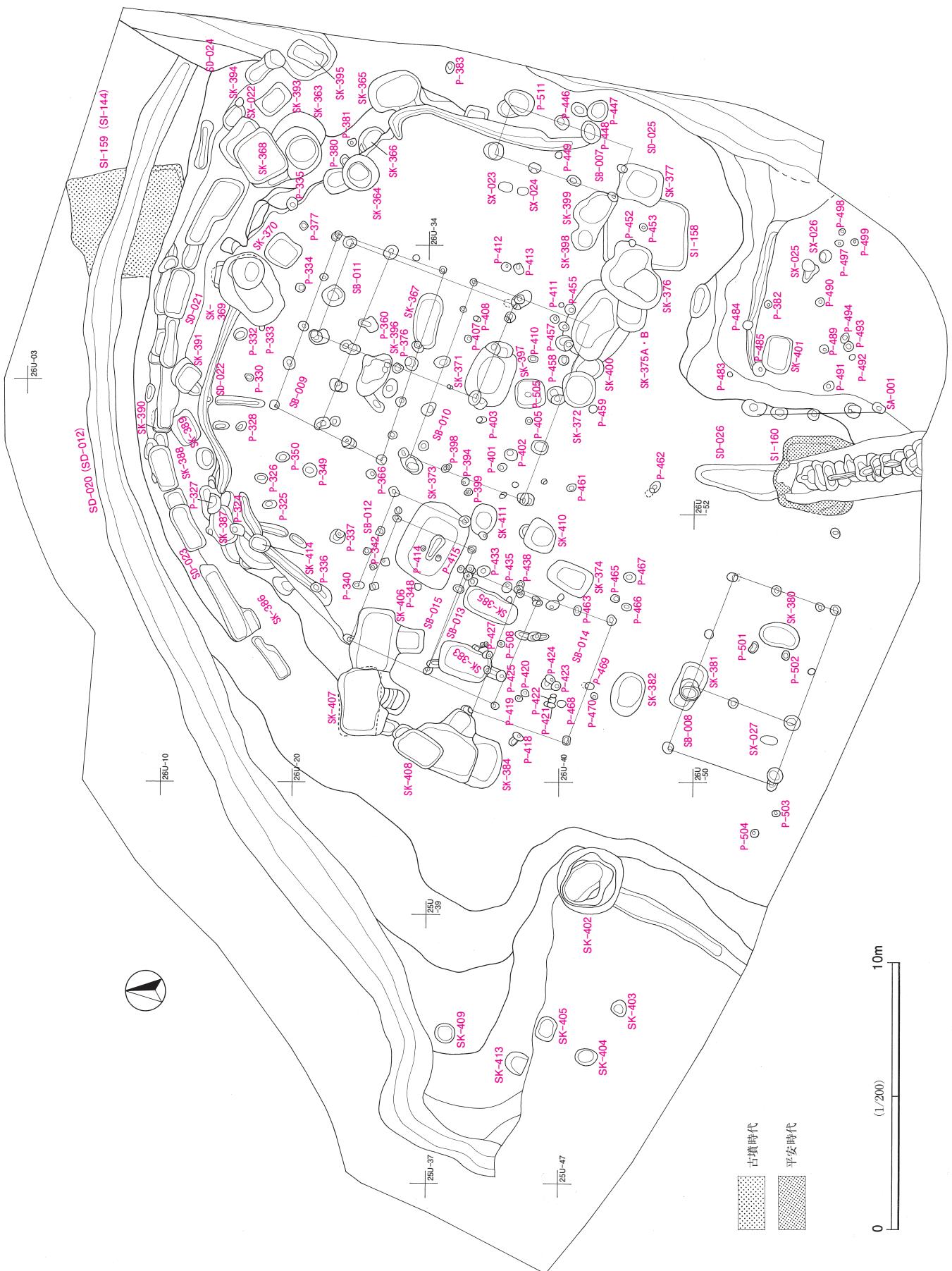
事業地外では、館ノ山遺跡の北側に馬場No.1 遺跡が位置する。これまで、2 回の発掘調査が行われている³⁾。主な成果は、弥生時代後期方形周溝墓 13 基、古墳時代後期竪穴住居 1 軒、奈良・平安時代竪穴住居 44 軒、掘立柱建物 4 棟、溝状遺構 2 条、道路 5 条、中世溝 1 条である。また、館ノ山遺跡と谷津を挟んだ南側の台地上には入ノ台第 2 遺跡があり、発掘調査が行われている⁴⁾。調査地点は、台地の南側で、館ノ山遺跡と向かい合う側ではないが、古墳時代後期竪穴住居 80 軒、奈良時代竪穴住居 7 軒、平安時代竪穴住居 15 軒など弥生時代後期から平安時代までの竪穴住居が重なり合って見つかった。

館ノ山遺跡の報告分の調査成果は、縄文時代後期竪穴住居 3 軒、縄文時代陥穴 3 基、古墳時代前期竪穴住居 2 軒、古墳時代中・後期竪穴住居 71 軒（うち後期 59 軒）、奈良・平安時代竪穴住居 9 軒、大形円形土坑 1 基、中～近世館跡、台地整形区画 4 か所、掘立柱建物 4 棟、空堀 2 条、土壙 1 条、溝状遺構 14 条、地下式坑 16 基、井戸状遺構 4 基、土坑（墓）・小穴・焼土遺構 417 基である。

本書で報告する館ノ山遺跡（4）の調査成果は、古墳時代後期竪穴住居 1 軒、平安時代竪穴住居 1 軒、中世台地整形区画 3 か所、溝状遺構 6 条、方形竪穴状遺構 2 基、掘立柱建物 9 棟、地下式坑 4 基、井戸状遺構 3 基、柵列 1 条、土坑 41 基、その他・小穴などが 103 基である。古墳時代後期の竪穴住居は、前回調査で北半分を調査している残りの部分にあたる。館ノ山遺跡（5）では遺構は確認されなかった。



第5図 館ノ山遺跡周辺の地形



第6図 館ノ山遺跡（4）遺構分布図

Y=33.000

24

Y=33.050

25

Y=33.100

26

Y=33.150

27

S

X=-35.200

X=-35.200

T

X=-35.250

X=-35.250

U

0

(1/500)

50m

第7図 館ノ山遺跡中～近世の遺構全体図



X=-35.300

館ノ山遺跡は、中世の館跡として注目されるが、それ以前の古墳時代後期にも相当規模の集落であった。調査面積からすると、物井地区の遺跡の中で、当該時期の竪穴住居が極めて集中している。こうした竪穴住居が重なり合う様相は、南側の入ノ台第2遺跡でも見られる。それに対して、東側部分が館ノ山遺跡に面する小屋ノ内遺跡では、古墳時代後期の竪穴住居11軒のうち、10軒が館ノ山遺跡の下から続く谷津に面して、散在している。また館ノ山遺跡の北に位置する稻荷塚遺跡でも古墳時代後期の竪穴住居が11軒検出されているが、やはり散在している。近くに竪穴住居を建てて集落を営むのに適した平地が十分にありながら、限られた範囲に竪穴住居を重なるように造っていることは、特別な事情があった可能性がある。奈良・平安時代になると、竪穴住居は大幅に減少している。北側の馬場No.1遺跡の方へ集落の中心が移動している可能性がある。また竪穴住居は重なり合わず、散在している。

中世になると、館ノ山という小字名のもとになったと思われる館が築かれた。出土した陶磁器・土器については、「主な時期は15世紀前葉～16世紀初頭であり、特に15世紀後半が多い。」と既刊の報告書に記載され（289頁）、館の時期も同様と考えてよからう。

物井地区遺跡群のこれまでの調査成果をみると、館ノ山遺跡をはじめとして東側に当たる北ノ作遺跡・古屋城跡・郷遺跡・稻荷塚遺跡・小屋ノ内遺跡・嶋越遺跡では、中～近世の遺構が多数検出されている。これに対して、西側ではわずかで、出口遺跡のカワラケ埋納土坑も遺跡の東側にある。このことから、中～近世においては、物井地区では東側の台地上に、集落などが集中していたと推測される。因みに、明治20年作成の陸軍迅速図でも、人家は東側にしか見えない。物井地区の東側の遺跡については、これまでの報告書の刊行で、嶋越遺跡を除いて、その相当部分の状況が報告されたため、現在では、総合的に検討することが可能になってきている。

館ノ山遺跡の中心的な時期である古墳時代後期と中世の遺跡については、先の報告書で詳しく触れているところであり（8～11頁、第6図）、参照されたい。その周辺遺跡の分布図を、第1図に遺跡を若干補足した上で再掲する。第1図の○が遺跡群・古墳群、●が古墳時代後期の集落遺跡、■が戦国前期の城館跡（本佐倉長勝寺脇館跡は後期）である。各遺跡の名称は、第1表のとおりである。

補足した遺跡には、古墳時代後期の相当規模の集落跡として、館ノ山遺跡から南へ鹿島川を遡った佐倉市岩富の岩富明代台西遺跡（14）、岩富漆谷津遺跡（15）があり、当該時期の竪穴住居が、それぞれ7軒と59軒検出されている。また、北の高崎川に面した佐倉市高岡（現在白銀）の高岡遺跡群（19）では、高岡大福寺遺跡で32軒、高岡大山遺跡で95軒の当該時期の竪穴住居が検出されている。四街道市成山の権現堂遺跡（16）でも、当該時期の竪穴住居が18軒検出されている。印西市平賀の旧印旛沼に南面する台地上にあって互いに近接した駒込遺跡（22）・油作第1遺跡（24）・油作第2遺跡（23）では、当該時期の竪穴住居が、それぞれ59軒、52軒、94軒検出されている。また、千葉市堀之内城跡（78）では、城跡の北側に位置する台地で中世居住域が検出されている⁵⁾。

注

- 1 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書の既刊分13冊は以下のとおりである。
1994『四街道市御山遺跡（1）－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書I－』
1999『四街道市出口・鐘塚遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書II－』
2005『四街道市小屋ノ内遺跡（1）旧石器時代編－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書III－』
2006『四街道市小屋ノ内遺跡（2）縄文～中・近世編－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書IV－』
2007『四街道市小屋ノ内遺跡（3）－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書V－』

- 2008 『四街道市郷遺跡・中久喜遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書VI－』
- 2009 『四街道市稻荷塚遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書VII－』
- 2009 『四街道市清水遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書VIII－』
- 2011 『四街道市館ノ山遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書IX－』
- 2011 『四街道市新久遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書X－』
- 2011 『四街道市清水遺跡・新久遺跡 旧石器時代編－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XI－』
- 2012 『四街道市出口遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XII－』
- 2013 『四街道市北ノ作遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XIII－』
- 2 2011 『千葉県四街道市鳴越遺跡(第2地点)－物井2号線埋蔵文化財調査委託－』(財)印旛郡市文化財センター
- 3 2007 『千葉県四街道市馬場No.1遺跡－物井の里宅地造成地内埋蔵文化財調査－』(財)印旛郡市文化財センター
- 2012 『印旛郡市文化財センター年報27－平成22年度－』(財)印旛郡市文化財センター
- 4 1990 『千葉県四街道市入ノ台第2遺跡発掘調査報告書』四街道市教育委員会
- 5 2012 『千葉県佐倉市岩富明代台西遺跡(第4次・第5次)－岩富6-263号線埋蔵文化財整理業務委託－』(財)印旛郡市文化財センター
- 1983 『岩富漆谷津・太田宿』佐倉市教育委員会
- 1993 『千葉県佐倉市高岡遺跡群I～IV 佐倉市高岡地区宅地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書(I)～(IV)』(財)印旛郡市文化財センター
- 2004 『千葉県四街道市権現堂遺跡－四街道市成台中土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査(II)－』(財)印旛郡市文化財センター
- 1986 『平賀』平賀遺跡群発掘調査会
- 1991 『千葉県印旛郡印旛村油作第1遺跡発掘調査報告書－印旛村立平賀小学校建設予定地内埋蔵文化財調査－』(財)印旛郡市文化財センター
- 1995 『千葉県印旛郡印旛村油作1-II遺跡発掘調査報告書－印旛村平賀小学校運動場拡張工事に伴う埋蔵文化財調査－』(財)印旛郡市文化財センター
- 2003 『千葉市堀之内城跡・免谷津遺跡・志保多遺跡』(財)千葉市教育振興財團

第2章 遺構と遺物

第1節 古墳時代

SI-159（第4表、第8図、図版3・11）

調査区北端部、26U-04 グリッド、館ノ山遺跡で検出された古墳時代集落の南東端に位置する竪穴住居である。前回の調査で検出されたSI-144の南西部分になる。南東隅から北西隅にSD-020が重複している。また、南西隅をSD-021により削平されている。

規模は推定で、長軸4.3m、短軸4.0m、面積は約16.6m²である。主軸方向はN-6°-Wである。壁溝は遺存範囲で検出された。柱穴は検出されなかった。カマドは北壁の中央部分に構築されていたことが前回の調査で確認されている。カマドの前面に当たる位置から焼土が検出された。

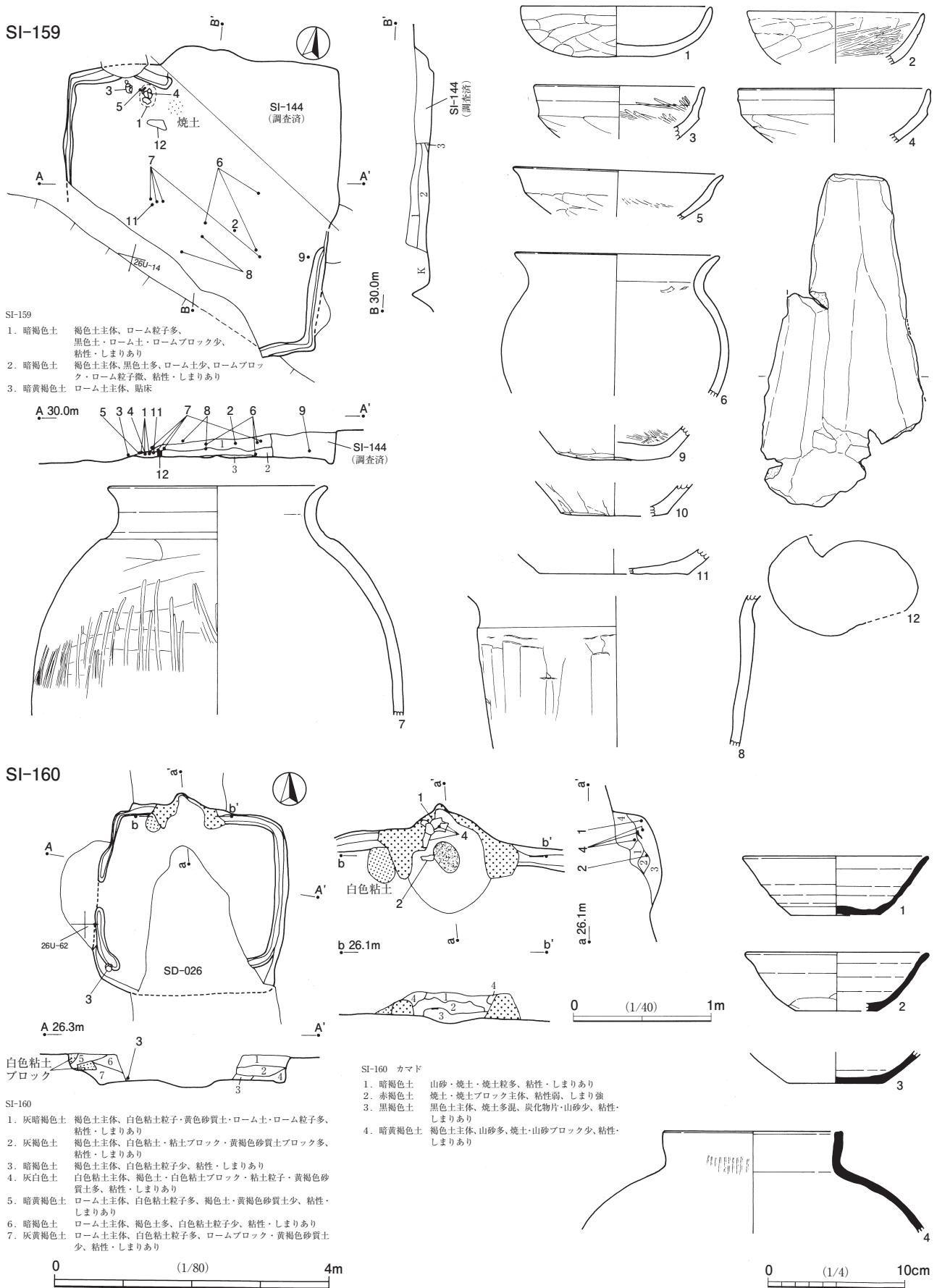
遺物はカマド付近と中央で出土した。床面直上または覆土中からの検出である。土師器11点と土製支脚1点を図示した。1～5は杯である。1は平らに近い丸底の底部から口縁部に向かい内湾しながら外方向に立ち上がる形状を呈する。器壁は厚く重量感のある杯である。口縁部ヨコナデの後、外面底部から口縁部まで横方向のヘラケズリを施し、内面は丁寧なナデを施す。2は口縁部から体部の一部のみの遺存である。口縁部ヨコナデの後、横方向のヘラケズリ、内面には粗いヘラミガキが施されている。3、4はほぼ同形で体部と口縁部との境に突出する稜を有する。口縁部ヨコナデの後、体部にヘラケズリを施している。5は突出する稜を有し口縁部は大きく外反する。口縁部ヨコナデの後、内面は粗いヘラミガキ、外面は横方向のヘラケズリを施している。6～7は甕である。6は小型の甕で口縁部は外反する。胴部中位までの遺存であるが、上位付近まで二次的な焼成を受けており、器面の荒れが著しい。7は口縁部が緩やかに外反する。胴部中位に最大径を有し、胴部中位以下は遺存しないもののやや長胴になる形態と思われる。外面は横方向のヘラケズリの後、縦方向の粗いヘラミガキが施されている。二次的な焼成により器面の荒れが著しい。8は甕で、口縁部と胴部上位のごく一部の遺存である。口縁部と胴部の境にヨコナデによる稜が確認できる。胴部には縦方向のヘラケズリが施される。9～11は甕の底部のみの遺存である。12は土製支脚で、カマド前の焼土付近からの出土である。出土土器から6世紀後半の所産である。

第2節 平安時代

SI-160（第4表、第8図、図版3・11）

調査区南端、26U-52 グリッドに位置する竪穴住居である。一辺2.8mの正方形を呈する。南北方向にSD-026が走っており、南壁と床面の約半分程度が削平されている。推定面積7.3m²である。主軸方向はほぼ真北を指す。壁溝は壁が遺存する部分で検出され、全周していたと考えられる。硬化面は確認されなかった。確認面からの深さは約40cmを測る。柱穴は検出されない。カマドは北壁の中央に構築され、灰黄褐色の山砂で袖部が形成されている。奥壁部は緩やかに立ち上がり、火床部は径20cmの円形を呈する。カマド内から須恵器の杯などが出土した。

図示した遺物はカマド奥の覆土中から出土した。1～3は須恵器の杯である。4は須恵器甕で、口縁部が短く垂直に立ち上がる。口縁直下から胴部にかけて縦方向のタタキが施されているが、タタキ目の痕跡は不明瞭である。出土土器はいずれも9世紀中葉の所産である。



第8図 SI-159・160

第3節 中世

1 台地整形区画・溝状遺構

台地整形区画H・I・J（第9図、図版3・4）

本遺跡では、地山を削り、溝状遺構などで囲んだ3か所の台地整形区画が確認された。調査区（4）の北側を囲むように位置している溝状遺構 SD-020 の内側を H 台地整形区画、調査区南側の西を I 台地整形区画、東を J 台地整形区画とした。I 台地整形区画はおおよそ 1.2 m 程度、J 台地整形区画は 50cm～60cm 程度掘り込んでいる。台地整形区画内からは、多数の土坑やピット群、掘立柱建物などが検出されている。I 台地整形区画と J 台地整形区画との間は谷に向かって開放され、谷津からの上がり口にあたる。台地整形区画内の居住空間の入り口になると考えられ、階段状遺構 SD-026、それに伴うと考えられる柵列 SA-001 などが検出された。I・J の台地整形区画内からもそれぞれに土坑や小穴が検出されており、台地整形区画内の遺構は切り合い関係から、掘立柱建物群が営まれた後に、土坑や小穴群を含む多くの遺構が配置されたものと思われる。

SD-020（第10図、図版4）

調査区北側に位置する緩やかな弧状の溝状遺構である。長さ約 45.5 m、幅 1.0 m～2.4 m、確認面からの深さは 6 cm～32 cm を測る。堆積土はローム粒子を非常に多く含む褐色土が主体である。平成 10 年度調査で一部を検出し SD-012 と呼称され、近世陶磁器などを出土しているが、調査区端部で検出したために、その性格は明瞭にできなかった。今回の調査で H 台地整形区画の北側を区画している溝状遺構であることことが明らかとなった。前に調査した東側調査区の SD-001 とつながる可能性がある。

SD-021・023（第11図、図版4）

調査区北側、SD-020 の南側に沿うように位置する。方形の土坑が連なっている形状で、SD-021 と SD-023 は一連の遺構と思われる。長さは約 37.5 m、幅は 1.5 m～2.4 m を測る。深さは確認面から 18 cm～44 cm である。堆積土はロームブロック・ローム粒子を多く含む暗褐色土または黄褐色土が主体である。

SD-022（第11図、図版4）

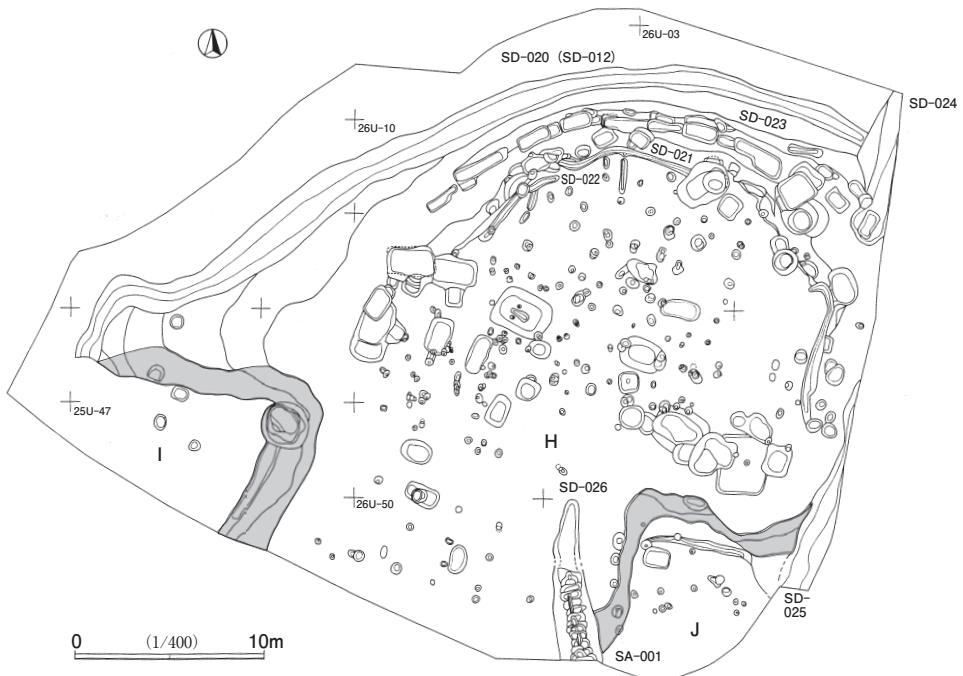
SD-021・023 の南側に同様な弧を描く。北東隅は搅乱により確認できないが、調査区東端で再び南北にのびる溝として検出される。長さは延べで 43.0 m である。幅は 0.6 m～1.3 m、確認面からの深さは 10 cm～15 cm である。堆積土はロームブロック・ローム粒子を少量含む黒色土が主体である。

SD-024（第12図、図版4・11）

調査区北東端の H 台地整形区画内で検出され、調査区外にのびている。幅は 0.9 m、確認できた長さは 4.0 m、確認面からの深さは 60 cm～130 cm である。南で検出された SD-025 と一連の遺構であろう。堆積土はローム粒子を含む褐色土が主体である。

SD-025（第13図、図版4・11）

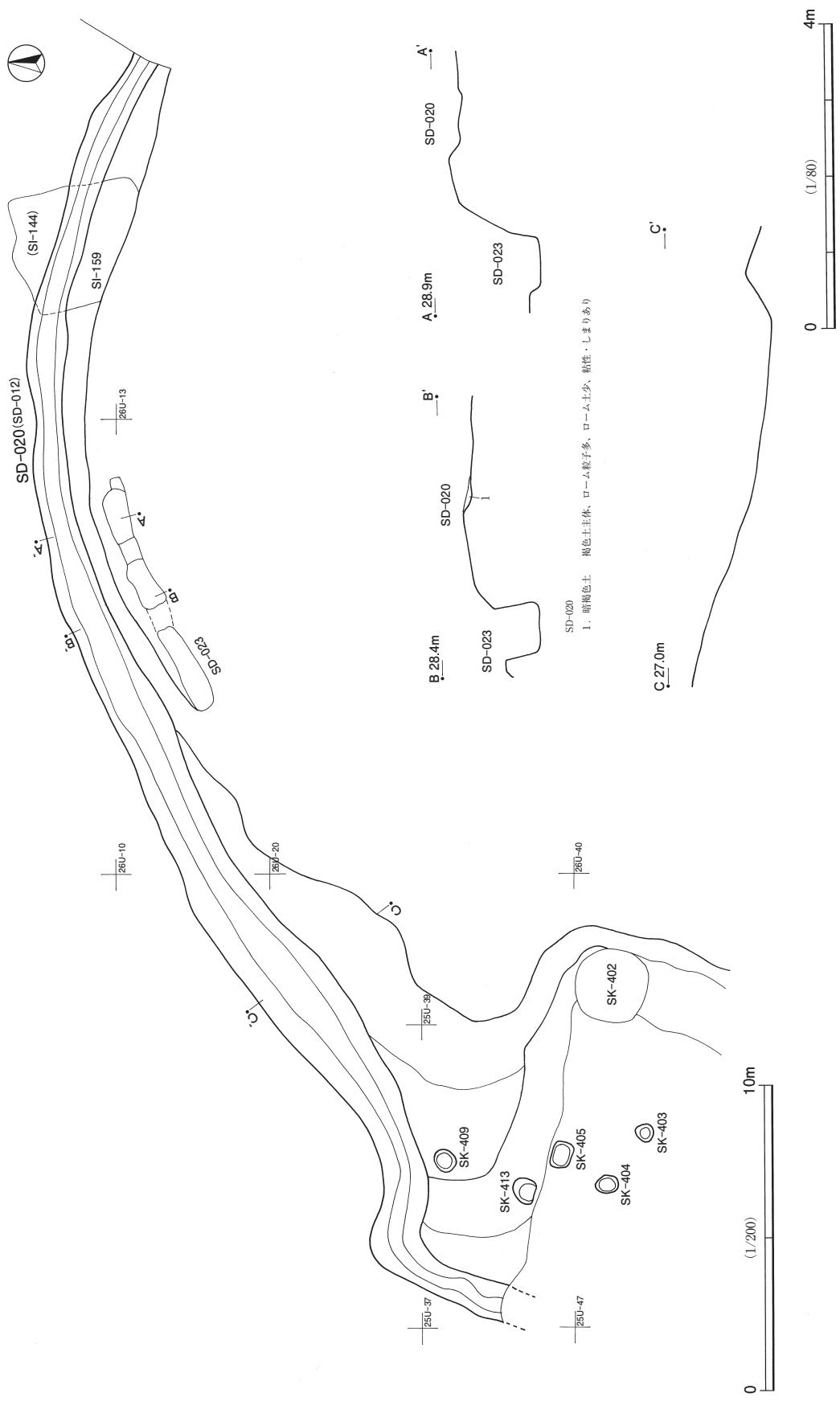
調査区南東端に位置する。ほとんどが調査区外となっているが J 台地整形区画を切るように構築され、掘立柱建物や土坑群のある平坦地の東側を区画する溝状遺構である。北側の SD-024 へ続くと思われる。出土遺物は 2 点である。1 は古瀬戸樽式花瓶で底部が遺存している。底部には糸切り痕が見られる。外面は淡緑色の灰釉が施され、胎土は灰白色である。藤澤編年古瀬戸後期 I 型式の 14 世紀の所産である。2 は常滑の片口鉢で、口縁部～底部までのごく一部が遺存する。内面には使用による摩耗が確認できる。胎土は赤褐色で小礫を含む。中野編年 8 型式で 14 世紀のものと思われる。



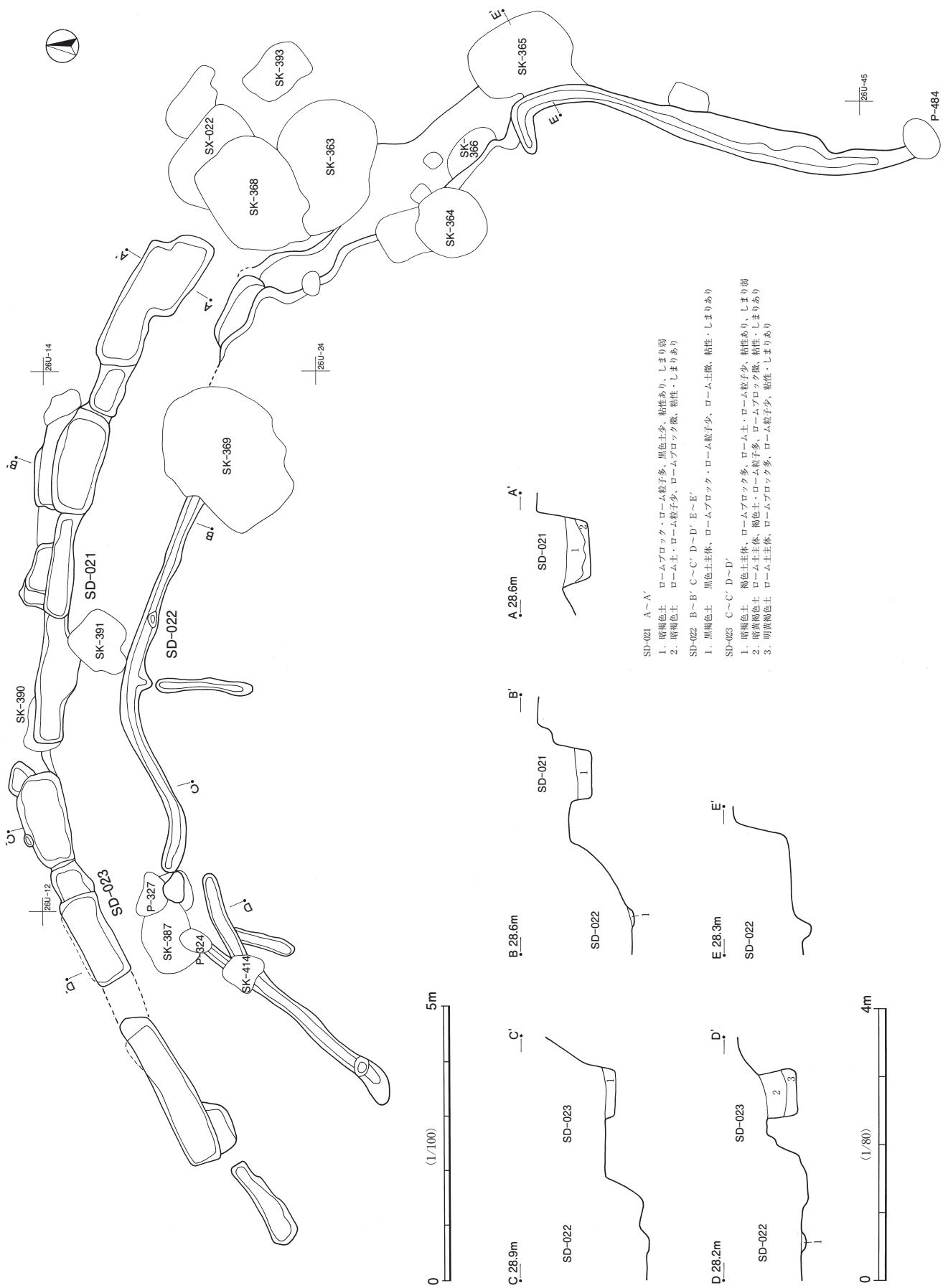
第9図 台地整形区画

第3表 土坑等計測表

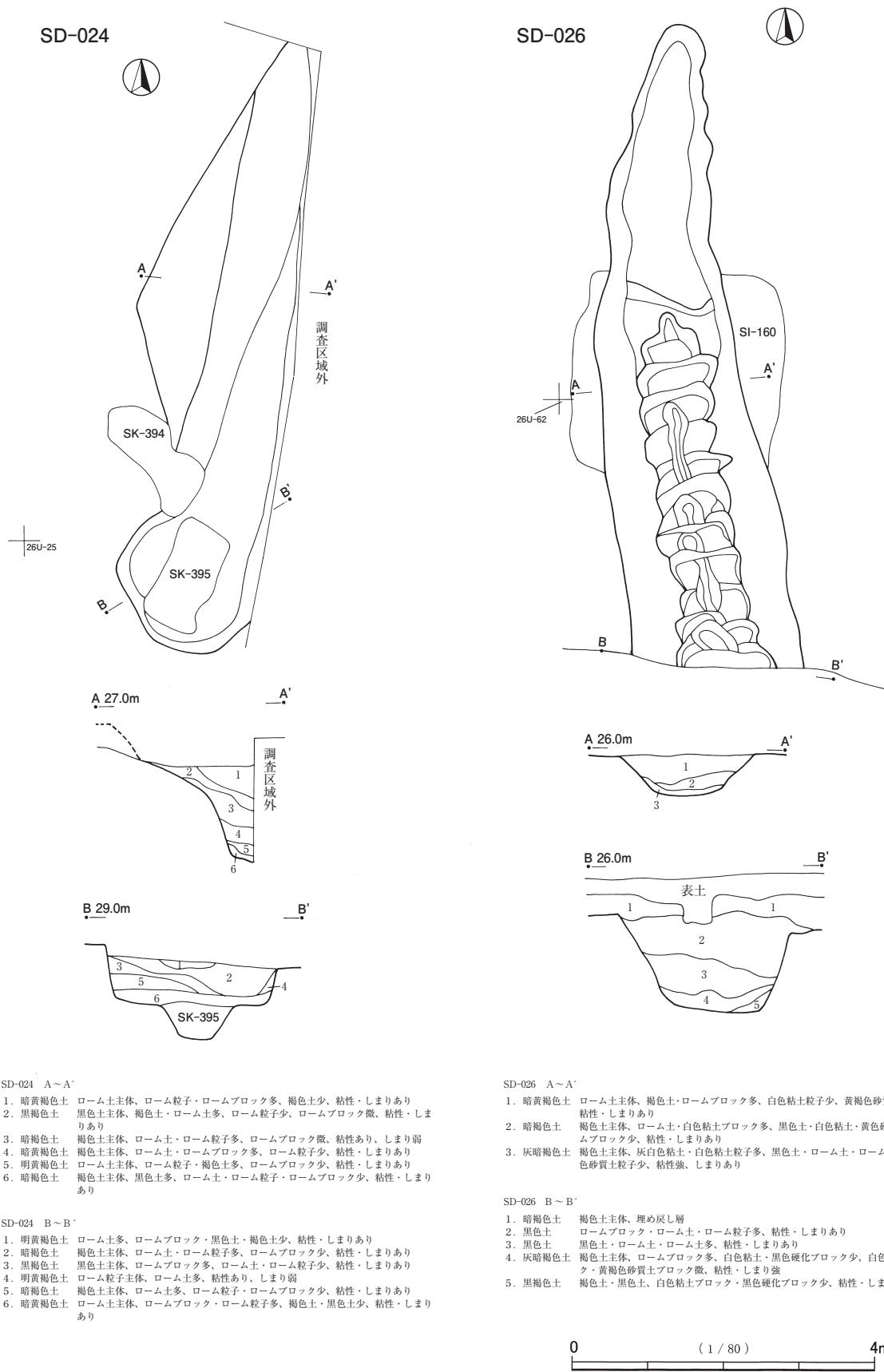
| 挿図 番号 | 遺構 番号 | 種類 | 位置 | 規模 (m) | | | 挿図 番号 | 遺構 番号 | 種類 | 位置 | 規模 (m) | | |
|----------|----------|---------|--------|-----------|-----------|-------|----------|----------|------|--------|-----------|-----------|------|
| | | | | 長軸 (径) | 短軸 (径) | 深さ | | | | | 長軸 (径) | 短軸 (径) | 深さ |
| 第13図 | SI-158 | 方形堅穴状遺構 | 26U-44 | 3.20 | 2.60 | 0.10 | 第21図 | SK-388 | 土坑 | 26U-12 | 0.85 | 0.70 | 0.18 |
| 第18図 | SK-363 | 井戸状遺構 | 26U-24 | 1.20 | 1.00 | 4.40+ | 第21図 | SK-389 | 土坑 | 26U-12 | 1.24 | 0.90 | 0.20 |
| 第18図 | SK-364 | 井戸状遺構 | 26U-24 | 1.36 | 1.00 | 2.50+ | 第21図 | SK-390 | 土坑 | 26U-02 | - | - | 0.58 |
| 第6図 | SK-365 | 土坑 | 26U-25 | 1.90 | - | 0.92 | 第21図 | SK-391 | 土坑 | 26U-12 | 1.26 | 1.00 | 0.42 |
| 第6図 | SK-366 | 土坑 | 26U-24 | 1.10 | - | 0.34 | 第6図 | SK-393 | 土坑 | 26U-15 | 1.18 | 0.72 | 0.28 |
| 第20図 | SK-367 | 土坑 | 26U-23 | 2.02 | 0.84 | 0.34 | 第6図 | SK-394 | 土坑 | 26U-15 | - | 0.64 | 0.48 |
| 第18図 | SK-368 | 土坑 | 26U-14 | 1.75 | 1.62 | 1.22 | 第6図 | SK-395 | 土坑 | 26U-25 | 1.40 | 0.69 | 0.45 |
| 第18図 | SK-369 | 井戸状遺構 | 26U-13 | 1.10 | 1.10 | 1.54+ | 第20図 | SK-396 | 土坑 | 26U-22 | 1.76 | 1.12 | 0.48 |
| 第6図 | SK-370 | 土坑 | 26U-13 | 1.08 | 1.06 | 0.36 | 第21図 | SK-397 | 土坑 | 26U-32 | 1.10 | 1.06 | 0.36 |
| 第20図 | SK-371 | 土坑 | 26U-32 | 2.30 | 1.60 | 0.68 | 第20図 | SK-398 | 土坑 | 26U-44 | 0.92 | - | 0.14 |
| 第20図 | SK-372 | 土坑 | 26U-42 | 1.25 | 1.20 | 0.26 | 第20図 | SK-399 | 土坑 | 26U-44 | - | 1.34 | 0.30 |
| 第13図 | SK-373 | 方形堅穴状遺構 | 26U-31 | 2.74 | 2.16 | 0.76 | 第20図 | SK-400 | 土坑 | 26U-43 | 1.10 | - | 0.06 |
| 第20図 | SK-374 | 土坑 | 26U-41 | 1.70 | 1.10 | 0.82 | 第22図 | SK-401 | 土坑 | 26U-53 | 1.26 | 1.02 | 0.40 |
| 第20図 | SK-375A | 土坑 | 26U-43 | - | 2.30 | 0.56 | 第19図 | SK-402 | 地下式坑 | 25U-49 | 2.48 | 2.36 | 0.88 |
| 第20図 | SK-375B | 土坑 | 26U-43 | - | - | 0.44 | 第22図 | SK-403 | 土坑 | 25U-48 | 0.58 | 0.56 | 0.16 |
| 第20図 | SK-376 | 土坑 | 26U-43 | 2.40 | 2.20 | 0.54 | 第22図 | SK-404 | 土坑 | 25U-47 | 0.68 | 0.62 | 0.12 |
| 第20図 | SK-377 | 土坑 | 26U-44 | 1.62 | 1.18 | 0.72 | 第22図 | SK-405 | 土坑 | 25U-38 | 0.84 | 0.60 | 0.52 |
| 第21図 | SK-380 | 土坑 | 26U-51 | 1.56 | 0.96 | 0.28 | 第19図 | SK-406 | 地下式坑 | 26U-21 | 2.54 | 2.42 | 1.14 |
| 第21図 | SK-381 | 土坑 | 26U-40 | 1.78 | 0.98 | 0.20 | 第19図 | SK-407 | 地下式坑 | 26U-20 | 2.65 | 2.54 | 2.42 |
| 第21図 | SK-382 | 土坑 | 26U-40 | 1.64 | 1.14 | 0.30 | 第22図 | SK-408 | 土坑 | 26U-20 | 3.82 | 2.04 | 0.26 |
| 第21図 | SK-383 | 土坑 | 26U-30 | 1.92 | 1.18 | 0.50 | 第22図 | SK-409 | 土坑 | 25U-38 | 0.70 | 0.66 | 0.10 |
| 第19図 | SK-384 | 地下式坑 | 26U-31 | 3.38 | 2.50 | 1.14 | 第22図 | SK-410 | 土坑 | 26U-31 | 1.12 | 1.05 | 0.38 |
| 第21図 | SK-385 | 土坑 | 26U-31 | 2.06 | 0.90 | 0.14 | 第22図 | SK-411 | 土坑 | 26U-31 | 1.04 | 0.88 | 0.08 |
| 第21図 | SK-386 | 土坑 | 26U-11 | 0.70 | - | 0.26 | 第6図 | SK-413 | 土坑 | 25U-37 | - | 0.78 | 0.38 |
| 第21図 | SK-387 | 土坑 | 26U-11 | - | 1.10 | 0.56 | 第21図 | SK-414 | 土坑 | 26U-11 | 0.66 | 0.62 | 0.20 |



第 10 図 SD-020



第11図 SD-021・023、SD-022



第 12 図 SD - 024 · 026

SD-026（第12図、図版5）

調査区南側、J台地整形の西側に位置する階段状の遺構である。台地下から台地整形区画内の居住空間に上がる階段状の通路と考えられる。11段の階段の後、台地上に上がった段階で、1.7m程度の長さの僅かな登り坂状となる。幅は0.5m～1.1mを測る。堆積土はロームブロック・ローム粒子を含む褐色土が主体である。

2 柵列

SA-001（第13図）

調査区南端、26U-63グリッド付近に位置する。南北に5基の小穴が配列され、北からP-486、P-487、P-488、P-495、P-496である。確認面からの深さは5基とも10cmである。間隔は南の2基が30cm、北の2基が20cmで、中央の1基との間隔は広く80cm～100cmである。階段状遺構SD-026に伴って構築されたものと考えられる。

3 方形堅穴状遺構（第3表）

SI-158（第13図、図版5）

調査区南東部、26U-44グリッドに位置する。SK-376・SK-377・SK-399に切られている。平面形は南北に長い方形で、規模は長軸3.20m、短軸2.60m、確認面からの深さは10cmで、長軸の方位はN-8°-Eである。床面は南側が低くなる傾斜で硬化面などは確認できない。南壁付近に焼土が検出されたが、カマドなどの施設ではないと判断した。遺構中央部でP-452とP-453を検出した。本遺構に伴うものかどうか不明であるが、P-453は深さ40cm、径は35cmを測る。出土遺物はない。

SK-373（第13図、図版9）

調査区中央、26U-31グリッドに位置する。東西方向に長い長方形を呈している。主軸方向はN-66°-Wである。長軸2.74m、短軸2.16mを測る。床面は平坦ではなく、中央には東西に長い楕円形のピットが検出された。床面からの深さは10cmである。このピットを挟むように、一対の小ピットが確認された。径は20cm、深さは4cm～6cmで浅い。出土遺物はない。

4 掘立柱建物

SB-007（第14図、図版5）

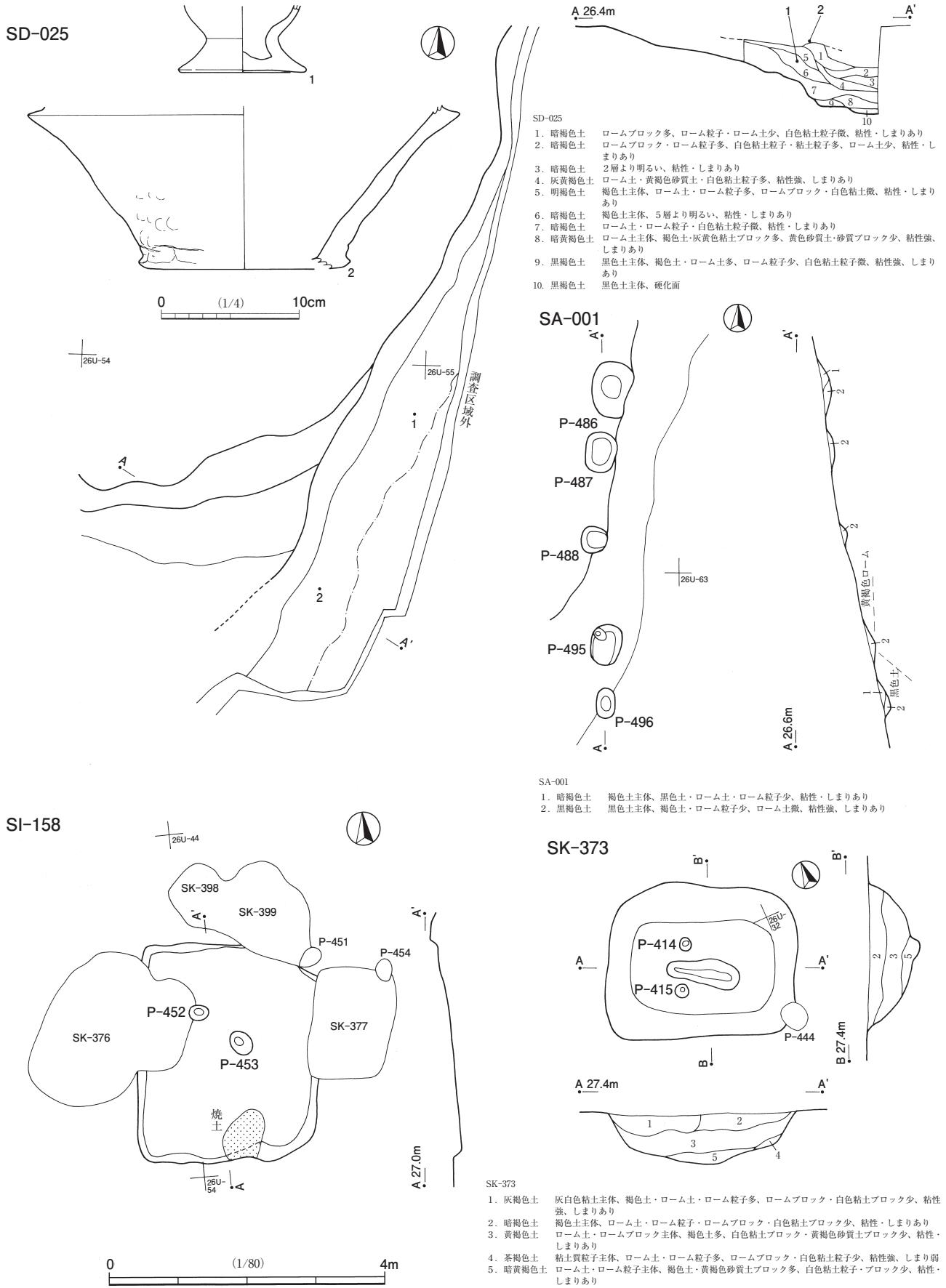
調査区東側、26U-34グリッドに位置する。桁行3間×梁行1間の建物と思われる。規模は桁行5.0m×梁行2.0mで、桁行方位はN-19°-Eである。SD-022を切るように東側の柱穴が構築されているものの、詳細は不明瞭である。東側の4か所目の柱穴は確認できなかった。柱穴の掘りかたは円形および楕円形で、径は30cm～60cm、確認面からの深さは10cm～50cmである。

SB-008（第14図、図版5）

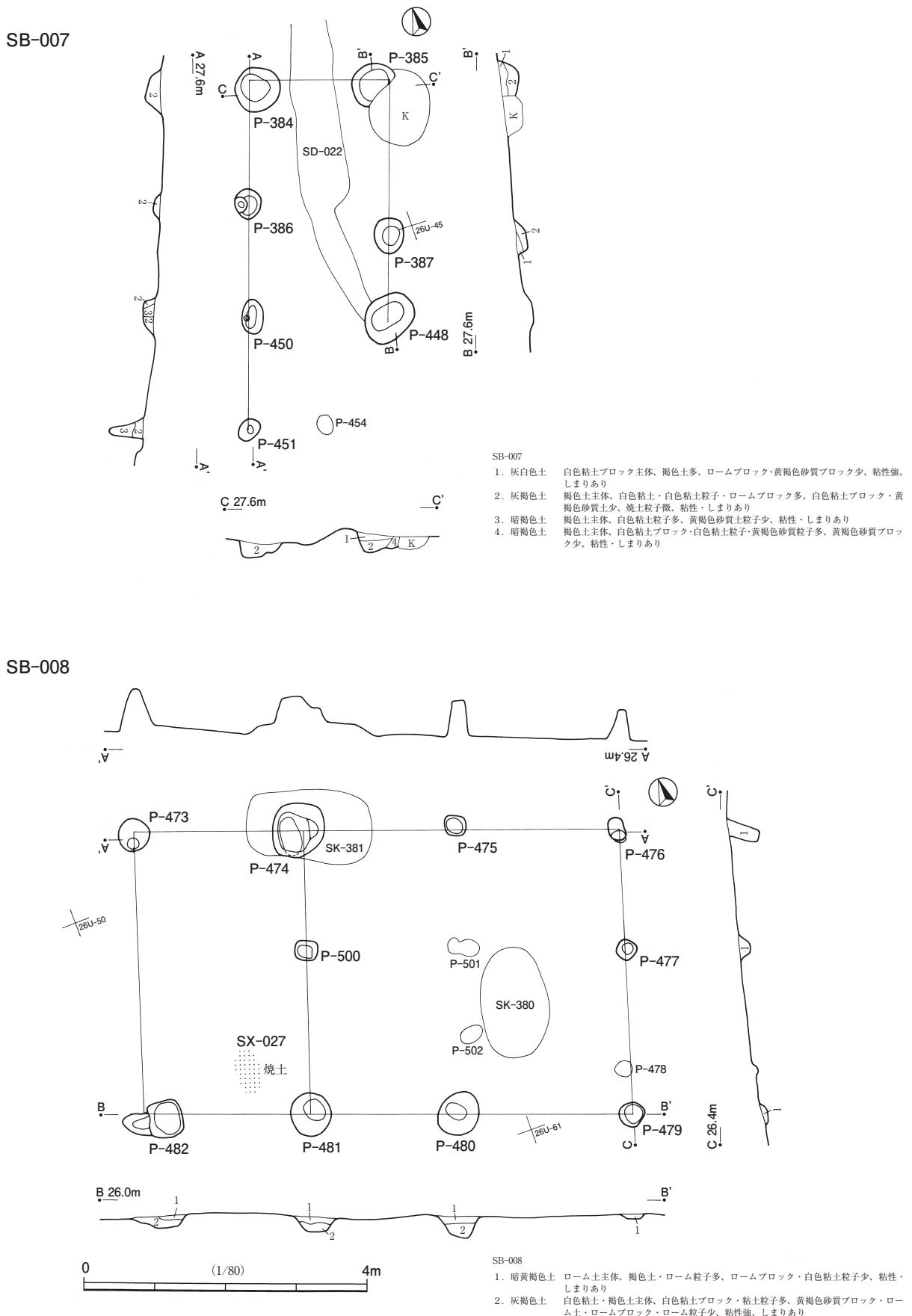
調査区南端、26U-50グリッドに位置する。桁行3間×梁行2間の建物と思われる。規模は桁行6.9m×梁行4.0mで、桁行方位はN-70°-Wである。西梁行中間に柱穴がみられない。焼土が検出された(SX-027)ことから、西側が土間であった可能性が考えられる。柱穴の掘りかたは円形で、径は30cm～60cmほどである。確認面からの深さは18cm～60cmを測る。

SB-009（第15図、図版5）

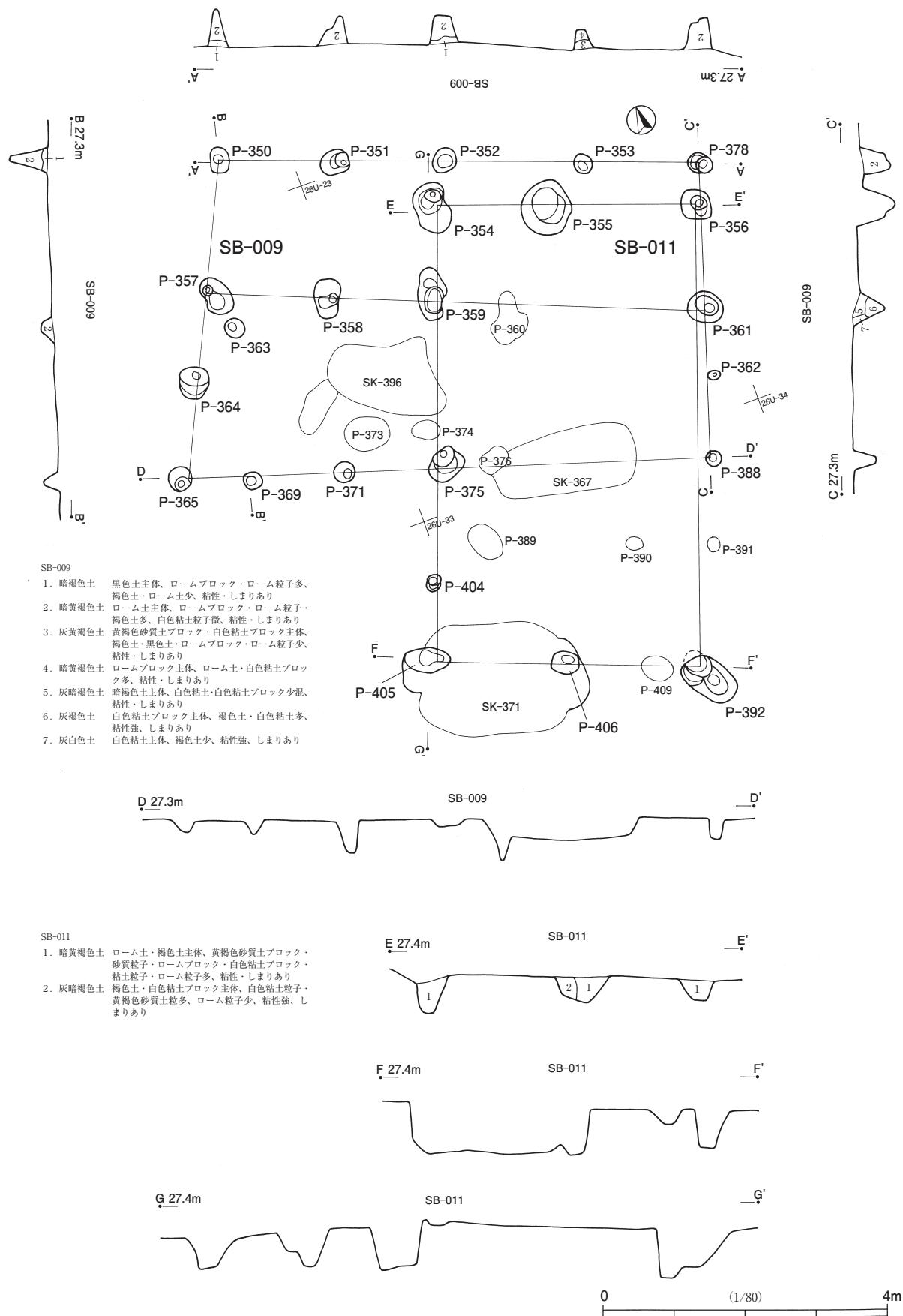
調査区中央、26U-23グリッドに位置する。桁行4間×梁行2間の建物と思われる。規模は桁行6.8m～7.4m×梁行4.2m～4.5mで、桁行方位はN-72°-Wである。SB-011と重複している。小ピットが多い。



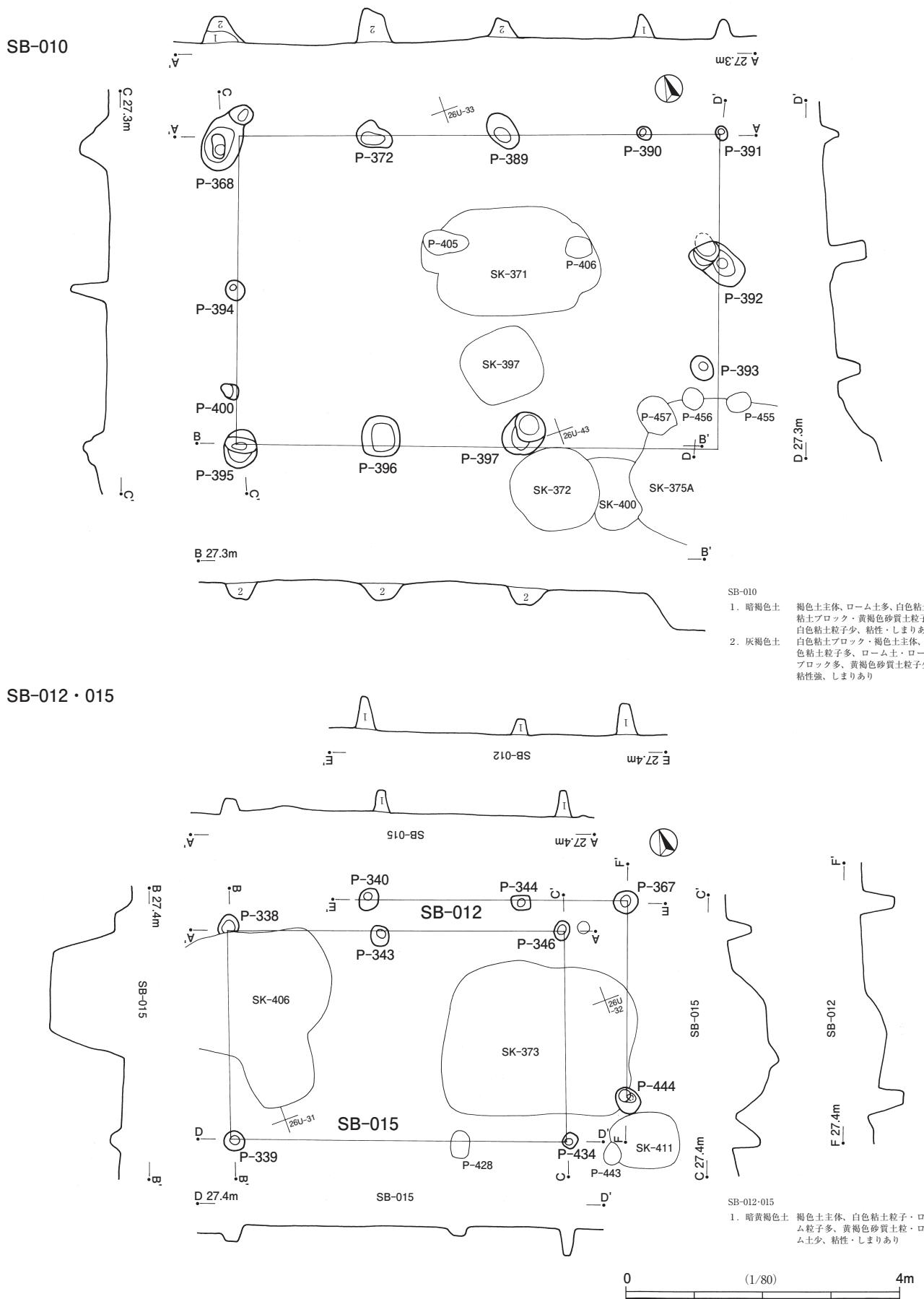
第13図 SD-025、SA-001、SI-158、SK-373



第 14 図 SB - 007 · 008

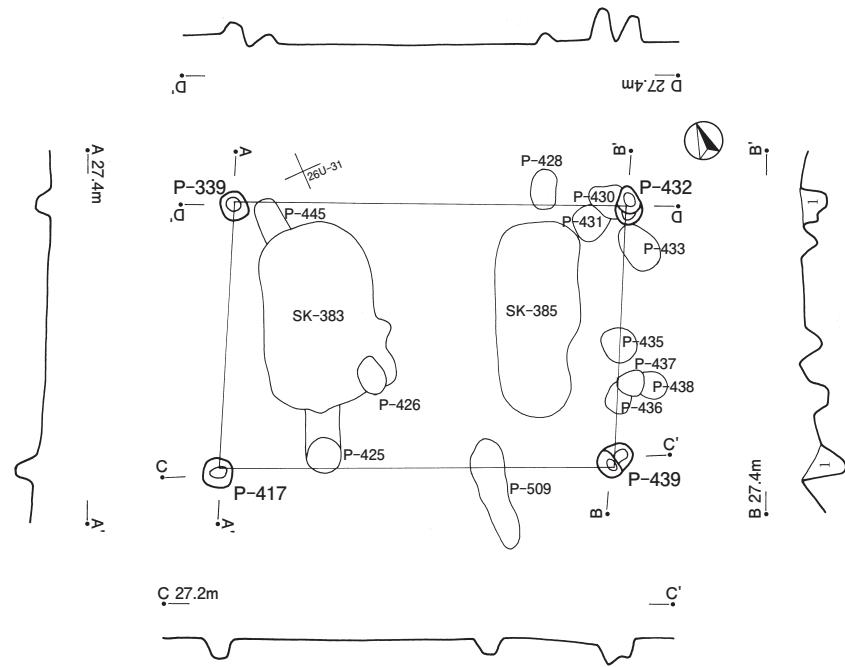


第15図 SB-009・011

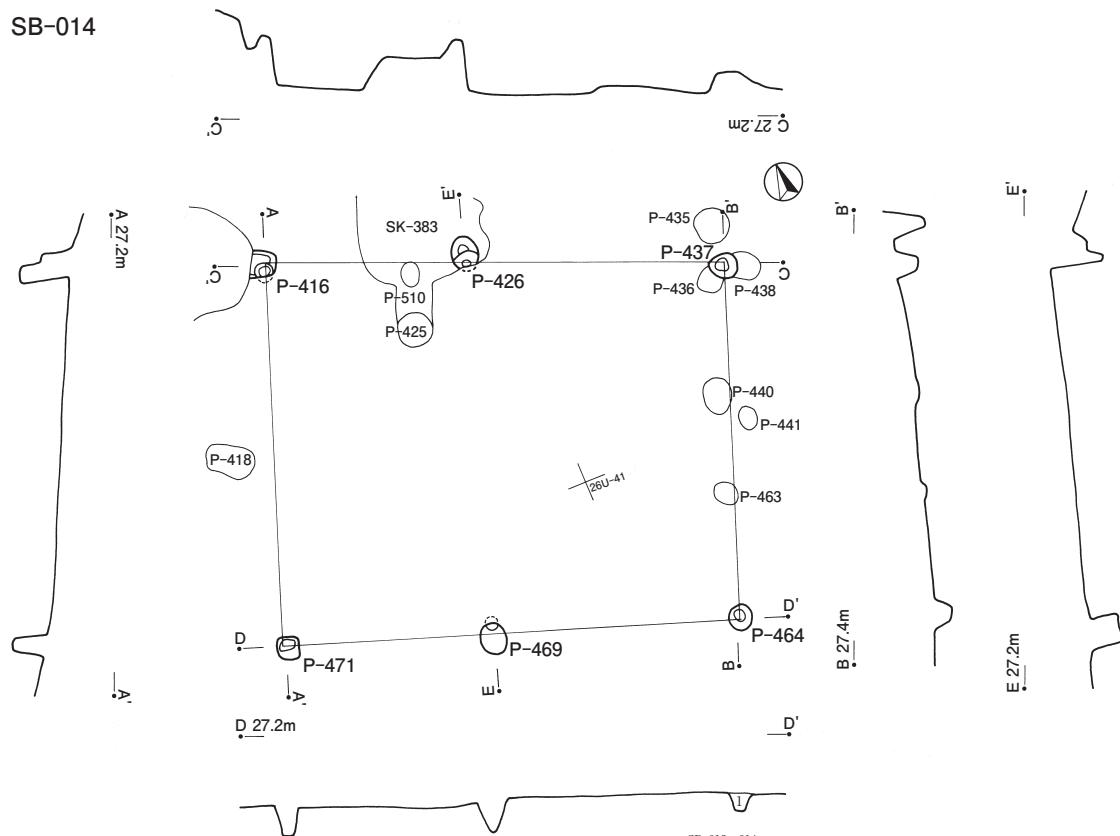


第16図 SB-010 · 012 · 015

SB-013



SB-014



SB-013・014
1. 暗黄褐色土 ローム土主体、白色粘土粒子多、ローム粒子・灰褐色土少、白色粘土ブロック微、粘性・しまりあり

0 (1/80) 4m

第 17 図 SB-013・014

く存在するが、柱筋が通り、柱間隔が規則的であるものを本建物の柱穴とした。東西桁行は北側で4間分の長さがあるが、南側が不規則で、また、SK-367で削平されていることもあり、不明瞭な点がある。柱穴の掘りかたは円形で、径は24cm～50cmである。確認面からの深さは12cm～46cmを測る。

SB-010（第16図）

調査区中央、26U-32グリッドに位置する。桁行4間×梁行2間の建物と思われる。規模は桁行7.0m×梁行4.5mで、桁行方位はN-72°-Wである。柱穴の掘りかたは円形・橢円形で、径は34cm～63cm、確認面からの深さは29cm～50cmを測る。

SB-011（第15図、図版5）

調査区中央、26U-23グリッドに位置する。桁行4間×梁行2間の建物と思われ、桁行方位N-18°-Eで、SB-009と直交するように重複する。南北梁行の柱穴は明確に確認されたものの、桁行中間の柱穴の所属が不明瞭である。規模は桁行6.4m～6.5m、梁行3.7mを測る。柱穴の掘りかたは円形または橢円形で、径44cm～78cm、深さ32cm～55cmである。

SB-012（第16図、図版5）

調査区中央、26U-21グリッドに位置する。桁行方位はN-70°-Wで、SB-015と桁行方位同じにし、北側と東側の柱穴列しか検出されなかつたため、SB-015の廂である可能性が考えられる。柱穴の掘りかたは円形で、径は25cm～34cmを測る。深さは22cm～50cmである。

SB-013（第17図）

調査区中央、26U-31グリッドに位置する。桁行1間×梁行1間の建物と思われる。規模は桁行4.2m、梁行2.8mを測る。桁行方位はN-68°-Wである。柱穴の掘りかたは円形で、径は30cm～38cmである。確認面からの深さは18cm～24cmを測る。

SB-014（第17図）

調査区中央26U-30グリッドに位置し、SB-013と重複する。桁行2間×梁行1間の建物と思われる。規模は桁行4.8m、梁行3.8m～4.1mである。桁行方位はN-70°-Wである。柱穴の掘りかたは円形で、径は24cm～33cmである。確認面からの深さは20cm～35cmを測る。

SB-015（第16図、図版5）

調査区中央、26U-21グリッドに位置する。残されている柱穴は北側の3か所と南側の2か所で、桁行2間×梁行1間の建物と思われる。柱穴の掘りかたは円形を呈し、径は27cm～33cmである。確認面からの深さは24cm～40cmである。方位を同じにするSB-012は本跡の廂となる可能性が考えられる。

5 井戸状遺構（第3表）

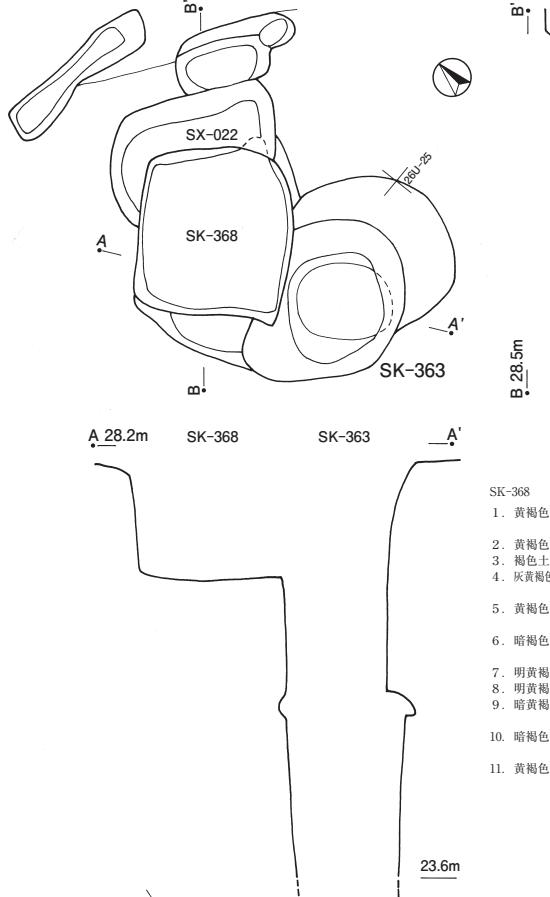
SK-363（第18図、図版9）

調査区北東端部、26U-24グリッドに位置する。北西側をSK-368に切られる。平面形は隅丸方形で、規模は長軸1.20m、短軸1.00mである。確認面から4.4m掘り下げて危険防止のため調査を中止した。壁面はほぼ垂直に下がり、若干すぼまる傾向が確認できる。確認面から2.5mほどの深さでオーバーハングする部分が検出された。出土遺物はない。

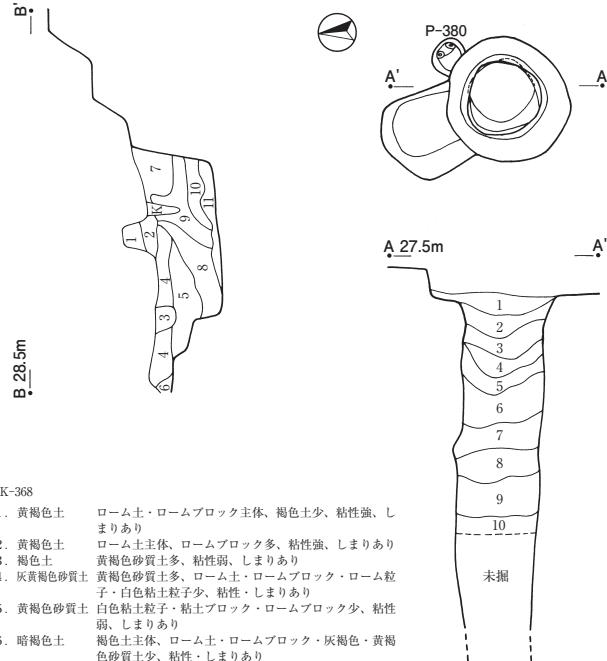
SK-364（第18図、図版9）

調査区北東端部、26U-24グリッドに位置する。平面形は円形で、径は1.36mである。危険防止のため、深さ2.5mのところで調査を中止した。堆積土は下層にローム土を多く含み、自然堆積と思われる。出土

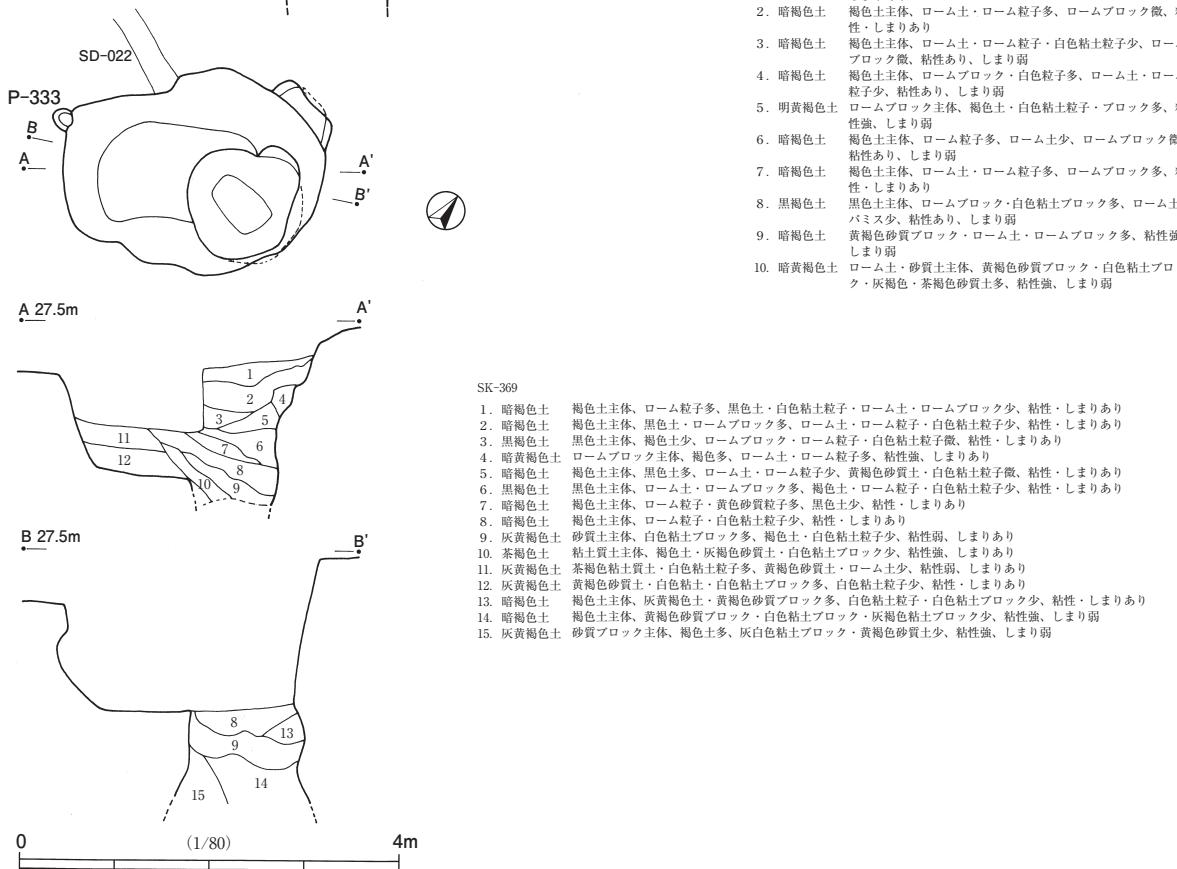
SK-363



SK-364



SK-369



第18図 SK-363・364・369

遺物はない。

SK-369 (第18図、図版9)

調査区北側、26U-13 グリッドに位置する。平面形は不整形で、橢円形の土坑と重複して円形の井戸を構築しているようである。径は 1.10 m である。堆積土はローム土主体の暗褐色土で、自然堆積と思われる。出土遺物はない。

6 地下式坑 (第3表)

地下式坑は4基検出した。SK-402 は I 台地整形区画北東隅、ほかの3基は H 台地整形区画南西端にまとまっており、入り口部を区画内に向けていた。

SK-384 (第19図、図版9)

調査区西側、26U-30 グリッドに位置する。SK-408 が重複して上に構築されており、天井部は確認できなかった。主室は横長の方形で、長さ 2.50 m、幅 3.38 m を測る。深さは東側の確認面から入り口部底面までは 82cm、入り口部底面から主室底面までが 35cm～37cm、西側の確認面から主室底面までが 1.14 m である。主軸方向は N-73° -W である。堆積土は入り口側から奥壁に向かって流れ込む。出土遺物はない。

SK-402 (第19図、図版8)

調査区南側 25U-49 グリッドに位置する。I 台地整形区画の北東隅に構築されている。平面形は隅丸の方形を呈する。一辺は 2.36 m～2.48 m である。南西隅付近が入り口部で、階段状に下がり主室に至る構造と考えられる。台地整形の掘り込み部分を利用している。褐色土主体で自然堆積の様相である。出土遺物はない。

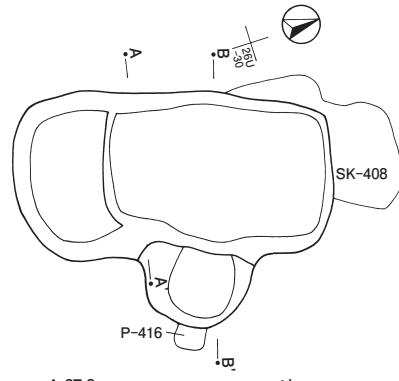
SK-406 (第19図、図版9)

調査区西側、26U-21 グリッドに位置する。西壁を SK-407 に切られる。入り口部の形状は方形で、主室は横長の方形を呈している。主軸方向は N-10° -E である。全体の長さ 2.54 m、最大幅は 2.42 m を測る。深さは、南側の確認面から入り口部底面までは 58cm、入り口部底面から主室底面までが 49cm～53cm、北側の確認面から主室底面までは 99cm である。網かけの範囲に白色粘土が貼られていることが確認でき、その状況から天井部などにも白色粘土が貼られていたと思われる。上層から下層まで白色粘土ブロック・粒子が含まれており、天井部崩落の状況がうかがえる。入り口部付近から主室の入り口付近はロームブロックや黒色土を主体とした褐色土が流れこんでおり、天井部崩落の後、自然堆積により埋まったものと考えられる。当該時期の出土遺物はない。

SK-407 (第19図、図版6・9)

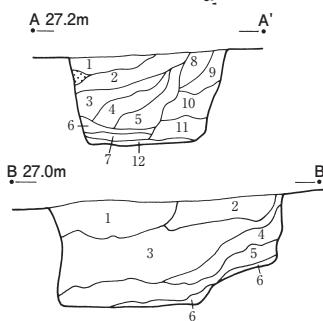
調査区西側、26U-20 グリッドに位置し、SK-406 を切る。入り口部の形状は方形で、主室は東西方向に長い方形である。入り口部の向きは主室に対して直角ではなく東に振れている。主軸方向は SK-406 と同様に N-10° -E である。全体の長さは 2.65 m、最大幅は 2.54 m を測る。入り口部は 3 段の階段状を呈し、確認面から 1 段目の深さは 1.22 m、1 段目から 2 段目は 4 cm、2 段目から 3 段目は 30 cm の段差を測る。主室の深さは入り口階段の 3 段目から 47 cm である。北側の確認面からの深さは 2.42 m を測る。奥壁は若干オーバーハングしている。堆積土中層でローム土主体の暗黄褐色土が確認でき、その上層に黒色土主体の層があることから、天井部崩落後に、土砂の流入により埋まっていった状況がうかがえる。白色粘土が含まれるのは、SK-406 を壊して本遺構を構築したことによると考えられる。出土遺物はない。

SK-384



SK-384 A ~ A'

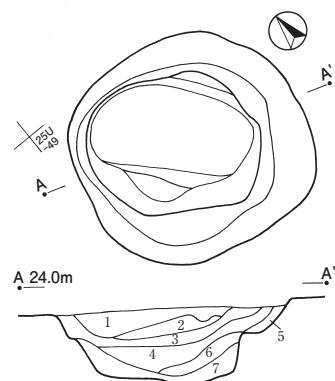
1. 暗褐色土 ローム土主体、褐色土多、ローム粒子少、ロームブロック・黄褐色砂質土ブロック少、粘性・しまりあり
2. 暗褐色土 褐色土主体、ローム土・ロームブロック多、ローム粒子・黑色土少、粘性・しまりあり
3. 暗黃褐色土 ローム土主体、ロームブロック多、褐色土・ローム粒子・黑色土少、粘性・しまりあり
4. 明黃褐色土 ローム土・ロームブロック主体、ローム粒子・褐色土少、粘性強、しまり弱
5. 黑褐色土 黑色土主体、ローム土・ロームブロック・ローム粒子・白色粘土ブロック少、粘性・しまりあり
6. 黄褐色土 ローム土・ローム粒子主体、ロームブロック・黑色土少、粘性・しまりあり
7. 暗黃褐色土 ローム土主体、ロームブロック多、粘性・しまりあり
8. 明黃褐色土 ローム土主体、ローム粒子・ロームブロック・白色粘土ブロック・粘土粒子少、粘性・しまりあり
9. 暗黃褐色土 ローム土・褐色土主体、ローム粒子多、白色粘土粒子少、粘性・しまりあり
10. 明黃褐色土 ローム土主体、褐色土・ローム粒子・ロームブロック少、粘性・しまりあり
11. 暗黃褐色土 ローム土・褐色土主体、ロームブロック・白色粘土粒子少、粘性・しまりあり
12. 灰褐色土 灰白色粘土・褐色土・黑色土主体、白色粘土粒子少、粘性・しまりあり



SK-384 B ~ B'

1. 黒褐色土 黑色土主体、褐色土・ローム土・ローム粒子・ロームブロック・白色粘土粒子少、粘性・しまりあり
2. 黄褐色土 ローム土主体、ローム粒子・ロームブロック多、粘性・しまりあり
3. 灰褐色土 白色粘土・粘土ブロック・ローム土・白色粘土粒子多、粘性強・しまりあり
4. 黄褐色土 ローム土・褐色土・ロームブロック多、白色粘土粒子少、粘土ブロック少、粘性・しまりあり
5. 黄褐色土 ロームブロック・褐色土・白色粘土粒子・ローム粒子少、粘性強・しまり弱
6. 灰褐色土 白色粘土・粘土粒子・ローム土・ロームブロック・ローム粒子・黑色土少、粘性強・しまりあり

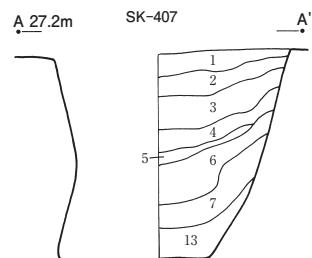
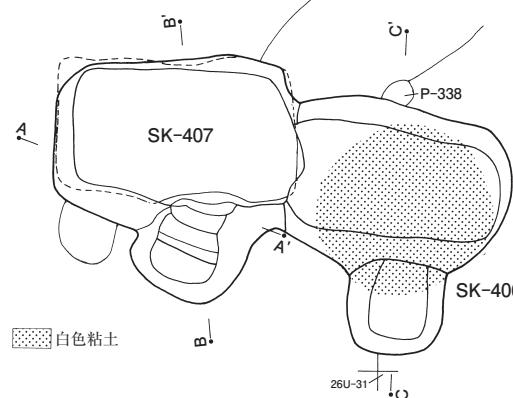
SK-402



SK-402

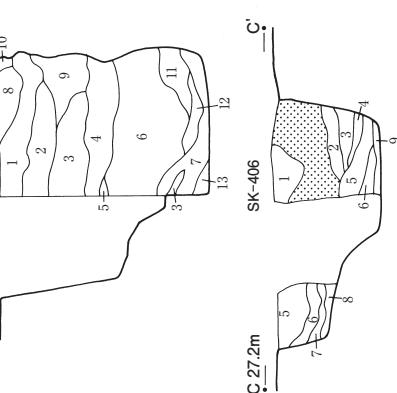
1. 黄褐色土 黄色砂質土・白色粘土縞状・褐色土・砂質土多、ロームブロック・白色粘土ブロック・砂質ブロック少、粘性・しまりあり
2. 黄褐色土 ローム土・白色粘土縞状・砂質ブロック・褐色土少、粘性・しまりあり
3. 暗褐色土 褐色土主体、白色粘土・黄褐色砂質土粒子多、白色粘土ブロック少、粘性・しまりあり
4. 黄褐色土 砂質土主体、砂質ブロック・白色粘土ブロック多、褐色土少、粘性・しまりあり
5. 暗褐色土 褐色土主体、3層と同じ、粘性・しまりあり
6. 暗黃褐色土 黄褐色砂質土・褐色土・黄褐色砂質ブロック・白色粘土ブロック少、粘性・しまりあり
7. 黄褐色土 黄褐色砂質土主体、黄褐色砂質土ブロック・白色粘土ブロック少、粘性弱・しまりあり

SK-406・407



SK-407

1. 暗褐色土 褐色土主体、ローム土・ロームブロック多、ローム粒子少、粘性・しまりあり
2. 黑褐色土 黑色土主体、ロームブロック多、ローム粒子少、ローム土微、粘性・しまりあり
3. 暗黃褐色土 ローム土主体、ローム粒子・ロームブロック多、褐色土多、粘性・しまり弱
4. 黑褐色土 黑色土主体、褐色土・ロームブロック・ローム粒子・白色粘土少、粘性・しまりあり
5. 暗黃褐色土 ローム土主体、褐色土・ローム粒子・白色粘土粒子多、粘性・しまりあり
6. 暗黃褐色土 ロームブロック・ローム土・白色粘土粒子・粘土ブロック少、褐色土・黑色土微、粘性強・しまりあり
7. 灰黃褐色土 白色粘土・ローム土縞状・褐色土・ローム粒子少、白色粘土粒子少、粘性強・しまりあり
8. 暗褐色土 褐色土主体、ロームブロック・ローム粒子多、ローム土少、粘性・しまりあり
9. 暗褐色土 褐色土主体、ロームブロック・ローム粒子少、白粘土粒子微、粘性・しまり弱
10. 明黃褐色土 ローム土主体、粘性強・しまりあり、天井部残存
11. 灰白色土 灰白色粘土・黄褐色砂質土・ロームブロック少、粘性強・しまりあり
12. 暗黃褐色土 ロームブロック・ローム土・ローム粒子・白色粘土粒子少、粘性強・しまり弱
13. 黄褐色砂質土 砂質土主体、白色粘土粒子・ローム粒子少、粘性強・しまりあり



SK-406

1. 灰褐色土 白色粘土・褐色土、粘性強・しまりあり
2. 褐色土 白色粘土ブロック・ローム土多、粘性・しまりあり
3. 暗褐色土 褐色土主体、黑色土・ローム土・ローム粒子・白色粘土粒子少、白色粘土ブロック・粘性・しまりあり
4. 灰白色土 白色粘土ブロック主体、黑色土ブロック・褐色土・白色粘土粒子少、粘性・しまりあり
5. 暗黃褐色土 ローム土・ロームブロック主体、ローム粒子多、白色粘土粒子・褐色土少、粘性・しまりあり
6. 黑褐色土 黑色土主体、褐色土・ローム土・白色粘土粒子少、ロームブロック微、粘性・しまりあり
7. 黑褐色土 黑色土主体、白色粘土ブロック多、褐色土・ローム土・白色粘土粒子少、粘性強・しまりあり
8. 灰褐色土 黑色土主体、白色粘土ブロック・粘土粒子多、ローム土少、粘性強・しまりあり
9. 灰褐色土 白色粘土ブロック主体、黑色土・褐色土・ローム土多、粘性強・しまりあり

0 (1/80) 4m

第19図 SK-384・402・406・407

第4節 その他の遺構と遺物

性格不明の土坑類と遺構外出土遺物について記述する。

1 遺構（第3表）

SK-367（第20図、図版6）

調査区中央、26U-23 グリッドに位置する。東西に長い方形を呈し、確認面での長軸は 2.02 m、短軸 0.84 m を測る。確認面からの深さは 34cm である。堆積土にはロームブロックを多く含み、埋め戻された様相がうかがえる。

SK-371（第20図、図版5）

調査区中央、26U-32 グリッドに位置する。東西方向に長い方形を呈し、長軸は 2.30 m、短軸は 1.60 m を測る。確認面からの深さは 50cm～68cm である。東西壁に張り出しがあり、その部分が一段高い構造となっている。東西壁に接する小穴 2 基は SB-011 の柱穴で、本遺構に伴うものではない。1 の小皿が 1 点出土した。古瀬戸縁釉小皿の口縁部で、胎土は黄白色、淡黄緑色の灰釉が施されている。藤澤編年古瀬戸後期 I 型式に該当する。

SK-372（第20図）

調査区東側、26U-42 グリッドに位置する。平面形は不整の円形で、径は確認面で 1.25 m である。底面は平坦で確認面からの深さは 26cm を測る。壁際に粘土ブロック主体の灰褐色土が確認できた。粘土貼りの痕跡と考えられる。堆積土はローム土が主体で、埋め戻されたものと思われる。

SK-374（第20図、図版6）

調査区中央、26U-41 グリッドに位置する。南北方向に長い楕円形を呈し、長軸 1.70 m、短軸 1.10 m を測る。底面での長軸 1.0 m、短軸 0.6 m である。確認面からの深さは 82cm である。堆積土はローム土が主体で、埋め戻されたと思われる。

SK-375A・B（第20図、図版6）

調査区中央、26U-43 グリッドに位置する。SK-375B は SK-375A に切られ、2 基は SK-376 に切られている。A は東西方向に長い不整の楕円形を呈している。確認面で短径は 2.30 m を測る。中位までなだらかに掘り込まれた後に、底面向かい急な掘り込みになる。確認面からの深さは 56cm である。B は遺存状態が悪く、平面形なども含め不明瞭である。

SK-376（第20図、図版6）

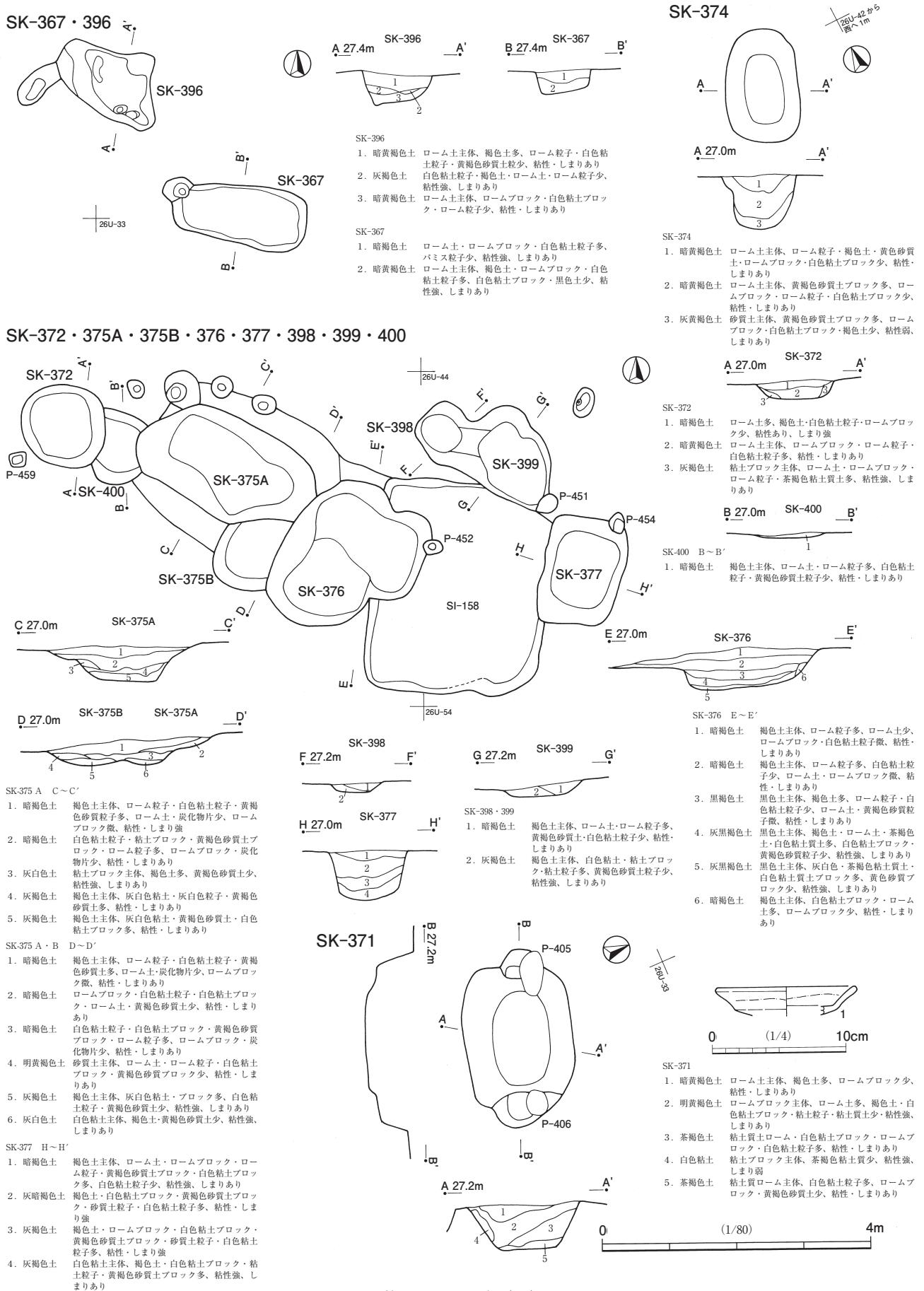
26U-43 グリッドに位置し、SK-375A・B と方形堅穴状遺構 SI-158 を切っている。長軸 2.40 m、短軸 2.20 m の方形の平面形を呈する。確認面からの深さは 46cm～54cm である。堆積土は下層が黒色土主体、上層はローム土を多く含む層である。

SK-377（第20図、図版7）

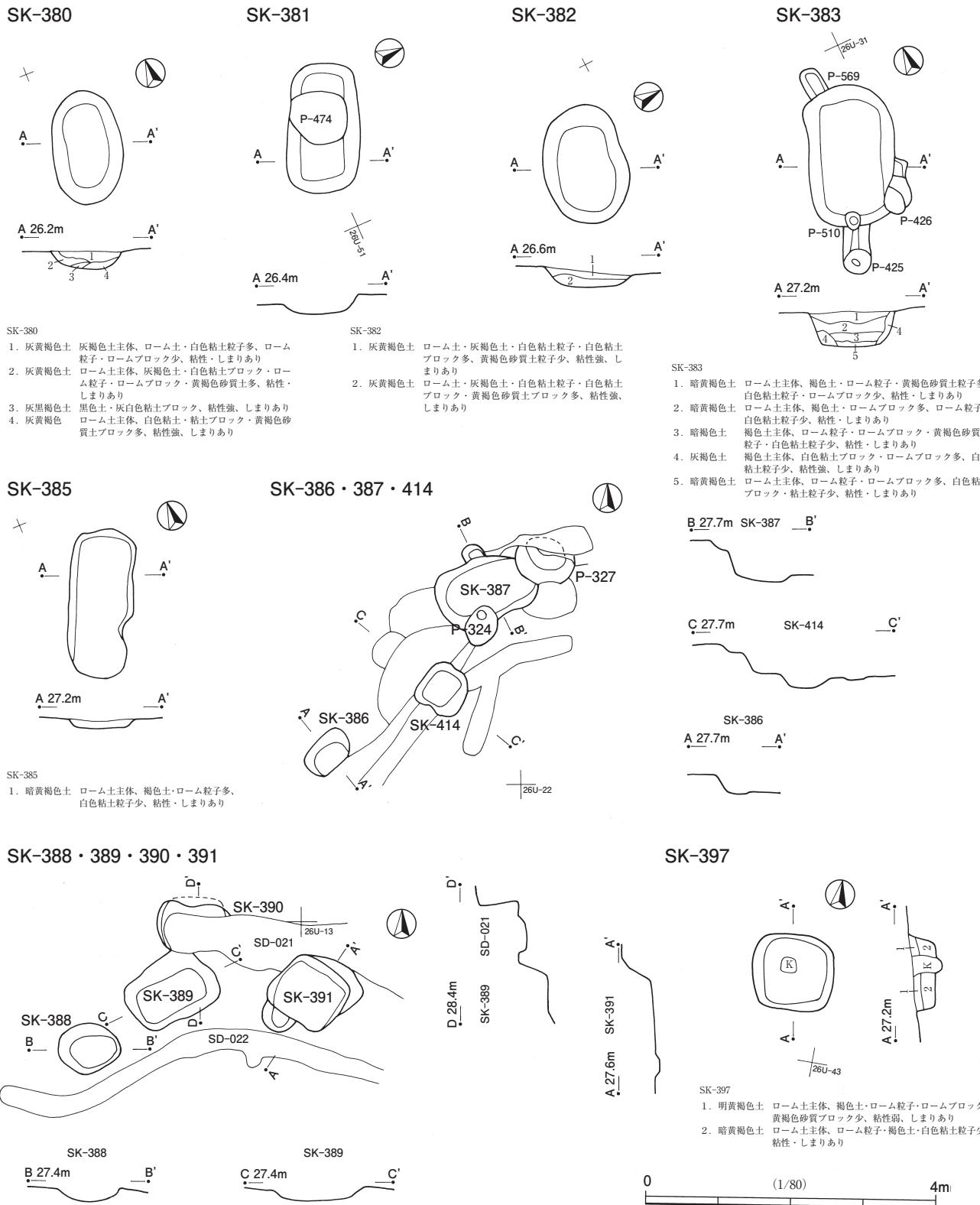
調査区東端、26U-44 グリッドに位置する。方形堅穴状遺構 SI-158 の東壁を切っている。平面形は南北に僅かに長い方形を呈している。長軸 1.62 m、短軸 1.18 m を測る。確認面からの深さは 72cm である。堆積土はローム土主体で、埋め戻しの様相である。

SK-380（第21図、図版7）

調査区南側、26U-51 グリッドに位置する。南北方向に長い楕円形を呈し、長径 1.56 m、短径 0.96 m である。確認面からの深さは 28cm を測る。



第20図 土坑（1）



第21図 土坑（2）

SK-381（第21図、図版7）

調査区南側、26U-40 グリッドに位置する。東西方向に長い方形を呈する。長軸 1.78 m、短軸 0.98 m、確認面からの深さは 20cm を測る。掘立柱建物 SB-008 の柱穴 P-474 と重複する。

SK-382（第21図、図版7）

調査区南側、26U-40 グリッドに位置する。平面形は東西方向に長い楕円形で、長径 1.64 m、短径 1.14 m を測る。確認面からの深さは 30cm ほどである。ローム土主体の堆積土で埋め戻しされたと思われる。

SK-383（第21図、図版7）

調査区中央、26U-31 グリッドに位置する。3基の地下式坑 SK-384・406・407 の前面に位置する。本遺構の東に位置する SK-385 と長軸方向を同一にする。平面形は南北方向に長い方形である。長軸 1.92 m、短軸 1.18 m、確認面からの深さは 50cm である。南東隅に掘立柱建物 SB-014 の柱穴が掘り込まれているが、新旧関係は不明瞭である。堆積土はローム土主体で埋め戻しの様相である。

SK-385（第21図、図版7）

SK-383 の東隣、26U-31 グリッドに位置する。平面形は南北方向に長い方形で、長軸 2.06 m、短軸 0.90 m、深さ 14cm である。堆積土はローム土主体の暗黄褐色土で、埋め戻されたと思われる。

SK-387（第21図、図版7）

調査区北側、26U-11 グリッドに位置する。溝状遺構 SD-022 に隣接し、その北側に位置する SD-023 との間に構築されている。P-324・327 と切り合っている。確認面からの深さは 56cm を測る。

SK-388（第21図、図版7）

調査区北側、26U-12 グリッドに位置する。溝状遺構 SD-022 と SD-023 とに挟まれた位置にある。平面形は不整の円形で、長径 0.85 m、短径 0.70 m である。確認面からの深さは 18cm である。

SK-389（第21図、図版7）

調査区北側、26U-12 グリッドに位置する。SK-388、SK-391 と並び、溝状遺構 SD-022 と SD-021 との間に位置する。平面形は東西方向に長い方形を呈する。長軸 1.24 m、短軸 0.90 m を測る。確認面からの深さは 20cm である。

SK-391（第21図、図版8）

SK-389 の東側、26U-12 グリッドに位置し、SD-021 を切る。平面形は方形で、長軸 1.26 m、短軸 1.00 m である。確認面からの深さは 42cm を測る。南側に円形に突出するピットを持つ。

SK-397（第21図、図版8）

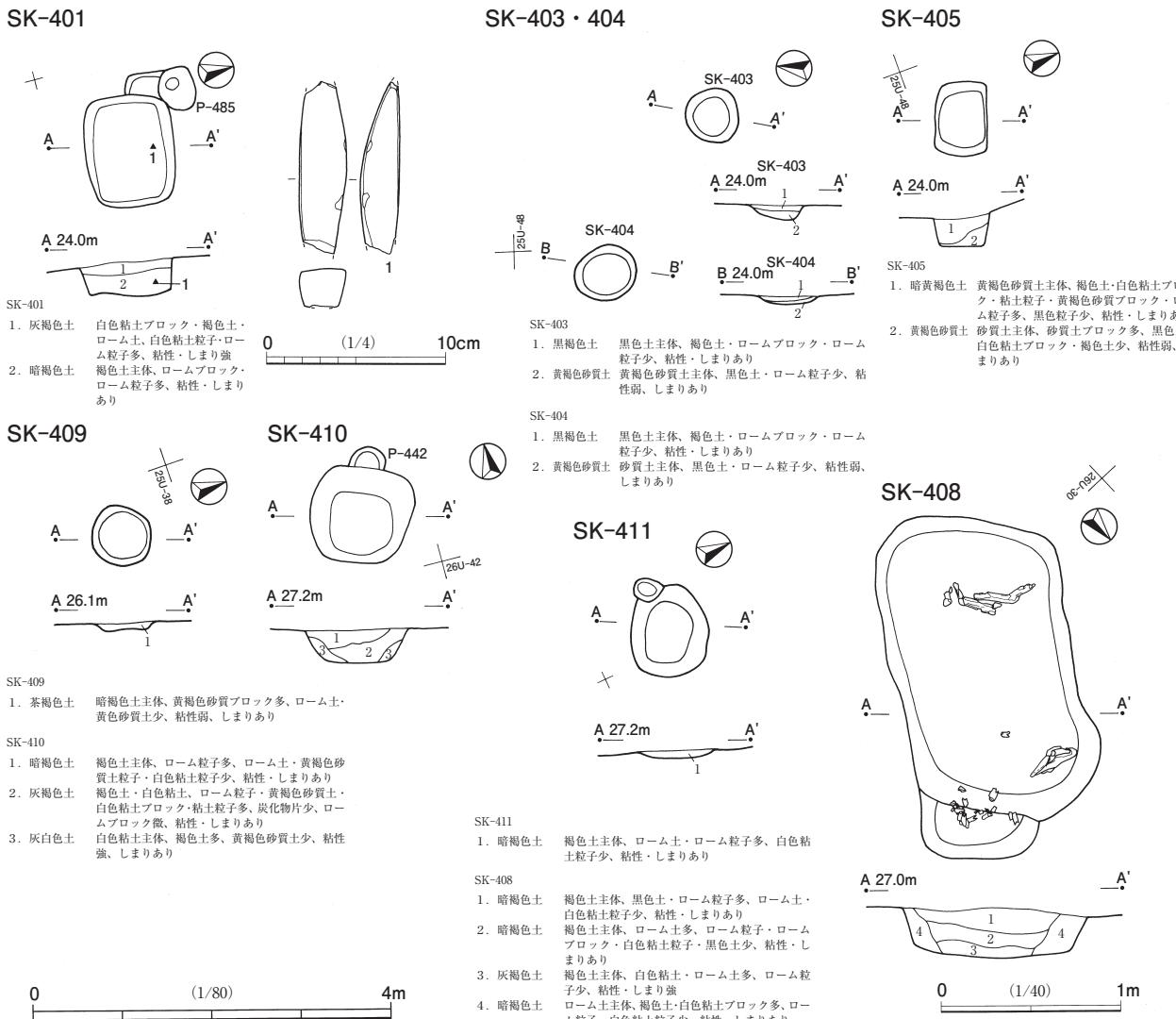
調査区中央、26U-32 グリッドに位置する。平面形は隅丸の方形である。一辺 1.06 m～1.10 m を測る。確認面からの深さは 36cm を測る。中央に位置するピットは本遺構に伴うものではなく、後世に掘り込まれたものである。堆積土はローム土主体で、埋め戻しの様相である。

SK-401（第22図、図版8・11）

調査区南側、J台地整形区画内の 26U-53 グリッドに位置する。平面形は東西に長い方形で、長軸 1.26 m、短軸 1.02 m を測る。底面は平坦で、確認面からの深さは 40cm である。覆土下層から砥石 1 点を出土した。1 は、最大長 9.8cm、最大幅 2.7cm、最大厚 2.0cm で、使用により両端がすり減っている。

SK-403～405（第22図、図版8・10）

調査区西側、I台地整形区画内の 25U-48 グリッド付近に位置する。SK-403、SK-404 は円形を呈し、



第22図 土坑(3)

径は60cm前後を測る。確認面からの深さは15cm前後である。SK-405は台地整形掘り込みの直下に位置し、平面形は方形である。長軸0.84m、短軸0.60mを測る。確認面からの深さは52cmである。堆積土は砂質土が主体の暗黄褐色土で自然堆積と思われる。

SK-408(第22図、図版10)

調査区中央、26U-20グリッドに位置する。平面形は長方形で、北壁に張り出し部分をもつ。長軸は3.82m、短軸2.04mを測る。確認面からの深さは26cmである。地下式坑SK-384の上に構築し、内部から馬の歯と骨が出土したため、近世の所産の可能性が高い。

SK-409(第22図、図版10)

H台地整形区画南東端の25U-38グリッドに位置する。円形で径0.70m、深さ10cmである。暗褐色土が堆積していた。

SK-410(第22図、図版10)

調査区中央26U-31グリッドに位置する。平面形は不整の隅丸方形で一边は1.05m～1.12mである。

底面は平坦で一辺は 0.70 m を測る。確認面からの深さは 38cm である。

SK-411 (第 22 図)

SK-410 の北側、26U-31 グリッドに位置する。不整な円形を呈し、長径 1.04 m、短径 0.88 m を測る。確認面からの深さは 8 cm と浅い。

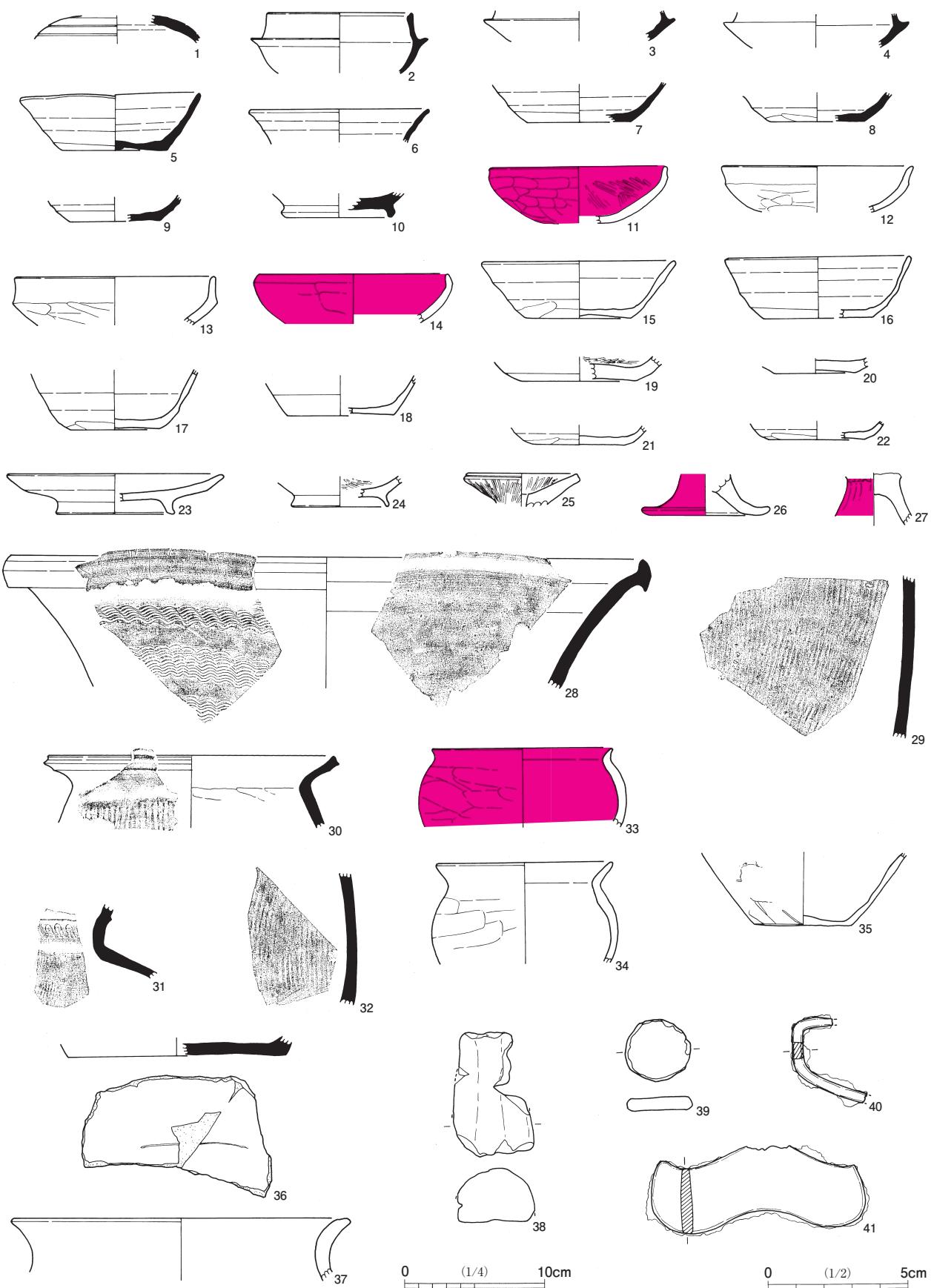
2 遺物 (第 4・5 表、第 23・24 図、図版 11)

1～10 は須恵器杯で、1 は蓋、2～10 は身である。11～24 は土師器杯である。25 は器台の器受け部、26、27 は高杯脚部である。28～32・36 は須恵器甕の破片で、28 は館ノ山遺跡 (5) 出土遺物で唯一図化できたものである。36 は底部外面中央にヘラ書きを施している。33～35・37 は土師器甕である。

38・39 は土製品で、38 は土製支脚である。39 は土製円盤で、土器片の周囲を研磨して円形に仕上げている。土師器甕片を利用したものと考えられる。

40・41 は鉄製品である。40 は棒状製品、41 は燧金であろう。42～46 は銭貨である。6 点出土したが、1 点は遺存状態が非常に悪く図化できなかった。溝状遺構や台地整形区画内などから出土した。42 は皇宋通寶、43 は永楽通寶の模鋳銭、44～46 は寛永通寶である。

47～49 は縄文時代の石器である。47・49 は磨石、48 は敲石として使用されている。50 は砥石である。凝灰岩製で、最大長 5.1cm、最大幅 2.5cm、最大厚 1.8cm で、上部に穿孔がある。



第23図 出土遺物(1)

第4表 土器観察表

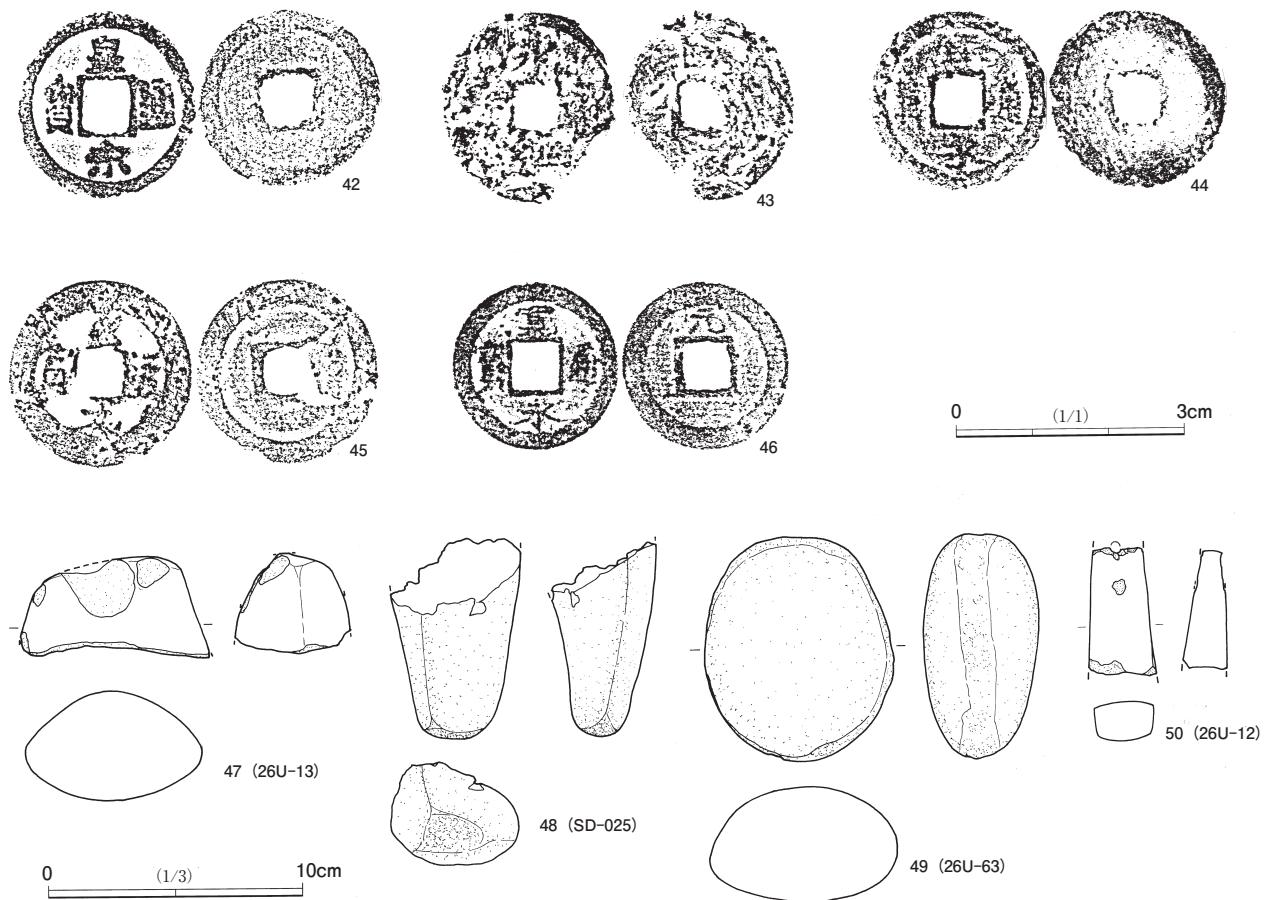
() 復元値、[] 遺存値、単位: cm

| 出土遺構 | 挿図番号 | 器質 | 器形 | 遺物番号 | 口径 | 底径 | 器高 | 色調 | 調整 | | 備考 |
|--------|------|----|-----|------------------------------|--------|--------|--------|-----|---------------|------------------|----------|
| | | | | | | | | | 内面 | 外面 | |
| SI-159 | 8 | 1 | 土師器 | 杯 2・74・75・76 | 13.8 | - | 4.0 | 橙褐色 | ナデ→ヨコナデ | ヨコナデ→ナデ | |
| SI-159 | 8 | 2 | 土師器 | 杯 8 | (11.6) | - | [3.9] | 褐色 | ヨコナデ→ヘラナデ・ミガキ | ヨコナデ→ヘラナデ | |
| SI-159 | 8 | 3 | 土師器 | 杯 2・73 | (12.3) | - | [3.9] | 黒褐色 | ヨコナデ→ヘラミガキ | ヨコナデ→ヘラケズリ | |
| SI-159 | 8 | 4 | 土師器 | 杯 75 | (13.8) | - | [4.0] | 黒褐色 | ナデ→ヨコナデ | ヨコナデ→ヘラケズリ | |
| SI-159 | 8 | 5 | 土師器 | 杯 70 | (15.0) | - | [3.4] | 橙褐色 | ヘラミガキ→ヨコナデ | ヨコナデ→ヘラケズリ | |
| SI-159 | 8 | 6 | 土師器 | 甕 1・5・13・14・50 | (14.7) | - | [10.4] | 橙褐色 | ヨコナデ→ナデ | ヨコナデ→ヘラケズリ | |
| SI-159 | 8 | 7 | 土師器 | 甕 1・2・6・33・37・47 | (15.5) | - | [16.3] | 赤褐色 | ヨコナデ→ナデ | ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ | |
| SI-159 | 8 | 8 | 土師器 | 甕 1・12・63 | - | - | [11.1] | 黒褐色 | ヨコナデ→ナデ | ヘラケズリ→ヨコナデ | |
| SI-159 | 8 | 9 | 土師器 | 甕 38 | - | (8.3) | [2.6] | 褐色 | ヘラミガキ | ヘラケズリ | |
| SI-159 | 8 | 10 | 土師器 | 甕 2 | - | (7.8) | [2.5] | 赤褐色 | ナデ | ヘラケズリ | |
| SI-159 | 8 | 11 | 土師器 | 甕 36 | - | (10.8) | [1.9] | 黒褐色 | ヘラナデ | ヘラナデ | |
| SI-160 | 8 | 1 | 須恵器 | 杯 2・7 | (13.5) | (6.5) | 4.3 | 灰色 | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| SI-160 | 8 | 2 | 須恵器 | 杯 1・2・3 | (13.0) | (6.0) | 4.3 | 灰褐色 | ロクロナデ | ロクロナデ→手持ちヘラケズリ | |
| SI-160 | 8 | 3 | 須恵器 | 杯 9 | - | 6.9 | [2.3] | 赤褐色 | ロクロナデ | ロクロナデ→回転ヘラケズリ | |
| SI-160 | 8 | 4 | 須恵器 | 甕 1・4・6・8 | (13.0) | - | [7.4] | 赤褐色 | ヨコナデ→ヘラナデ | タタキ・ナデ→ヨコナデ | |
| 遺構外 | 23 | 1 | 須恵器 | 蓋 H台地整形 26U-11-1 | - | - | [2.0] | 灰色 | ロクロナデ | ロクロナデ→回転ヘラケズリ | |
| 遺構外 | 23 | 2 | 須恵器 | 杯 H台地整形 26U-21-1 | (10.4) | - | [4.5] | 灰色 | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 遺構外 | 23 | 3 | 須恵器 | 杯 H台地整形 26U-30-1 | - | - | [2.2] | 灰色 | ヨコナデ→ナデ | ヨコナデ→ナデ | |
| 遺構外 | 23 | 4 | 須恵器 | 杯 SK-406-1 | - | - | [2.4] | 灰褐色 | ヨコナデ→ナデ | ヨコナデ→ナデ | |
| 遺構外 | 23 | 5 | 須恵器 | 杯 SK-406-1・SK-375-1 | 12.7 | 7.5 | 4.1 | 灰褐色 | ロクロナデ | ロクロナデ→回転ヘラケズリ | |
| 遺構外 | 23 | 6 | 須恵器 | 杯 J台地整形 26U-52-1・26U-63-1 | (12.7) | - | [2.5] | 灰色 | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 遺構外 | 23 | 7 | 須恵器 | 杯 J台地整形 26U-64-1 | - | (7.4) | [2.8] | 灰色 | ロクロナデ | ロクロナデ→回転ヘラケズリ | |
| 遺構外 | 23 | 8 | 須恵器 | 杯 J台地整形 26U-63-1 | - | (6.7) | [2.1] | 灰色 | ロクロナデ | ロクロナデ→手持ちヘラケズリ | |
| 遺構外 | 23 | 9 | 須恵器 | 杯 J台地整形 26U-63-1 | - | (6.4) | [1.8] | 灰色 | ロクロナデ | ロクロナデ→回転ヘラケズリ | |
| 遺構外 | 23 | 10 | 須恵器 | 杯 SK-364-2 | - | (7.6) | [1.8] | 灰白色 | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 遺構外 | 23 | 11 | 土師器 | 杯 SK-384-1 | (12.3) | - | [4.1] | 褐色 | ヨコナデ→ヘラミガキ | ヨコナデ→ヘラケズリ | 内外面赤彩 |
| 遺構外 | 23 | 12 | 土師器 | 杯 H台地整形 26U-23-1 | (13.5) | - | [3.3] | 黒褐色 | ヨコナデ→ナデ | ヨコナデ→ヘラナデ | |
| 遺構外 | 23 | 13 | 土師器 | 杯 H台地整形 26U-13-1 | (14.0) | - | [3.5] | 褐色 | ヨコナデ→ナデ | ヨコナデ→ヘラケズリ | |
| 遺構外 | 23 | 14 | 土師器 | 杯 SK-407-1 | (13.3) | - | [3.5] | 赤褐色 | ヨコナデ→ナデ | ヨコナデ→ヘラケズリ | 内外面赤彩 |
| 遺構外 | 23 | 15 | 土師器 | 杯 SK-384-1・SK-369-1・26U-13-1 | (13.5) | (7.4) | 4.1 | 赤褐色 | ロクロナデ | ロクロナデ→手持ちヘラケズリ | |
| 遺構外 | 23 | 16 | 土師器 | 杯 J台地整形 26U-63-1 | (12.8) | (7.8) | 4.4 | 黒褐色 | ロクロナデ | ロクロナデ→回転ヘラケズリ | |
| 遺構外 | 23 | 17 | 土師器 | 杯 SD-026-1 | - | (6.3) | [4.3] | 黒褐色 | ナデ | ナデ→ヘラケズリ | |
| 遺構外 | 23 | 18 | 土師器 | 杯 J台地整形 26U-63-1 | - | (7.6) | [2.9] | 赤褐色 | ロクロナデ | ロクロナデ→回転ヘラケズリ | |
| 遺構外 | 23 | 19 | 土師器 | 杯 J台地整形 26U-63-1 | - | (8.2) | [1.9] | 赤褐色 | ヘラミガキ | ナデ→ヘラケズリ | 内面黒色処理 |
| 遺構外 | 23 | 20 | 土師器 | 杯 SK-384-2 | - | (5.8) | [1.0] | 褐色 | ロクロナデ | 手持ちヘラケズリ | |
| 遺構外 | 23 | 21 | 土師器 | 杯 SD-025-1 | - | (6.4) | [1.5] | 黒褐色 | ロクロナデ | ロクロナデ→回転ヘラケズリ | |
| 遺構外 | 23 | 22 | 土師器 | 杯 J台地整形 26U-52-1 | - | (6.9) | [1.4] | 黄褐色 | ロクロナデ | ロクロナデ→手持ちヘラケズリ | |
| 遺構外 | 23 | 23 | 土師器 | 皿 J台地整形 26U-64-1 | (15.2) | (8.3) | (2.9) | 赤褐色 | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 遺構外 | 23 | 24 | 土師器 | 杯 J台地整形 26U-63-1 | - | (6.8) | [2.2] | 赤褐色 | ナデ→ヘラミガキ | ナデ | |
| 遺構外 | 23 | 25 | 土師器 | 器台 SK-406-1 | 7.7 | - | [2.5] | 褐色 | ヨコナデ→ヘラミガキ | ヨコナデ→ヘラミガキ | |
| 遺構外 | 23 | 26 | 土師器 | 高杯 H台地整形 26U-12-1 | - | (7.9) | [3.0] | 赤褐色 | ヘラケズリ→ヨコナデ | ヘラナデ→ヨコナデ | 外面赤彩 |
| 遺構外 | 23 | 27 | 土師器 | 高杯 J台地整形 26U-64-1 | - | - | [2.7] | 赤褐色 | ヘラケズリ | ヘラナデ | 外面赤彩 |
| 遺構外 | 23 | 28 | 須恵器 | 甕 26S-27-1 | (44.9) | - | [9.3] | 灰色 | ナデ | ナデ→波状文 | |
| 遺構外 | 23 | 29 | 須恵器 | 甕 SK-406-2 | - | - | - | 灰色 | 当て具痕 | タタキ | 外面へラ書き |
| 遺構外 | 23 | 30 | 須恵器 | 甕 SK-402-2 | (20.1) | - | [5.1] | 褐色 | ヨコナデ→ヘラナデ | ヨコナデ→タタキ | |
| 遺構外 | 23 | 31 | 須恵器 | 甕 H台地整形 26U-12-1 | - | - | - | 灰色 | 当て具痕 | タタキ→ナデ・波状文 | |
| 遺構外 | 23 | 32 | 須恵器 | 甕 SK-384-3 | - | - | - | 灰色 | ナデ | タタキ | |
| 遺構外 | 23 | 33 | 土師器 | 甕 SD-026-1 | (12.7) | - | [5.6] | 赤褐色 | ヨコナデ→ナデ | ヨコナデ→ヘラナデ | 内外面赤彩 |
| 遺構外 | 23 | 34 | 土師器 | 甕 H台地整形 26U-14-1 | (12.4) | - | [7.3] | 褐色 | ヨコナデ→ナデ | ヘラナデ→ヨコナデ | |
| 遺構外 | 23 | 35 | 土師器 | 甕 SK-384-1 | - | (7.0) | [5.3] | 黒褐色 | ナデ | ヘラナデ | |
| 遺構外 | 23 | 36 | 須恵器 | 甕 J台地整形 26U-53-1・26U-64-1 | - | (15.5) | [1.3] | 赤褐色 | ナデ | ヘラケズリ | 底部外面へラ書き |
| 遺構外 | 23 | 37 | 土師器 | 甕 SK-406-1 | (23.7) | - | [4.5] | 黄褐色 | ヨコナデ→ナデ | ヨコナデ | |

第5表 錢貨計測表

計測位置は凡例参照

| 出土遺構 | 挿図番号 | 遺物番号 | 種類 | 時代 | 材質 | G (mm) | N (mm) | g (mm) | n (mm) | T (mm) | 重量 (g) | |
|---------|------|------|-----------|------|----|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----|
| SD-026 | 24 | 42 | 2 | 皇宋通寶 | 北宋 | 銅 | 24.42 | 20.30 | 8.86 | 6.50 | 1.19 | 2.5 |
| SK-363 | 24 | 43 | 2 | 永樂通寶 | 近世 | 銅 | 24.71 | 21.22 | 9.07 | 4.90 | 1.72 | 2.5 |
| H台地整形区画 | 24 | 44 | 26U-32-11 | 寛永通寶 | 近世 | 銅 | 23.58 | 19.83 | 8.58 | 6.20 | 1.06 | 1.8 |
| H台地整形区画 | 24 | 45 | 26U-23-10 | 寛永通寶 | 近世 | 銅 | 24.64 | 17.18 | 8.62 | 6.10 | 1.29 | 2.1 |
| H台地整形区画 | 24 | 46 | 26U-12-39 | 寛永通寶 | 近世 | 銅 | 22.45 | 17.65 | 8.32 | 6.20 | 1.06 | 1.7 |



第24図 出土遺物（2）

第3章 まとめ

本章では、既に報告された部分も含めて、館ノ山遺跡の掘立柱建物群からなる館の構造について見てみたい。

まず、館の台地上での位置についてである。遺跡が立地する台地は、第1章で記述したように大きな台地の先端部に当たり、北東側はせまい尾根で台地本体とつながっている。東・西・南の三方を深い谷津に囲まれ、北から南へ向かって幅が増す台形を呈している。標高は北東部分が最も高く、そこから南東と南西に向かって低くなっている。館は北側の最も高い位置ではなく、南側の3m～5m低い場所に築かれている。

こうした立地は、あたかも冬の北風を避けたかのようである。季節風が吹きつける北西側に土塁が築かれていたことは（『四街道市館ノ山遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書IX－』210～213頁、以下『報告書』とする）、こうした推測を支持しよう。さらに、（4）の調査範囲の南側で検出された斜面を南へ下るSD-026の階段状の溝は、館と台地下の谷津の縁をめぐる道とをつなぐ通路と見ることができ、館の出入口は南側にあったと考えられる。このことも上記の推測を支持しよう。

館の造営には、北西－南東方向の基準方位が設けられていたと思われる。掘立柱建物の桁行方向、台地整形区画の方向がこの方位に揃えられている。こうした基準方位は、東側に位置する嶋越遺跡の中世遺構には見られない。西側の小屋ノ内遺跡では、館ノ山遺跡に面する東部地区のSX-032の台地整形区画と内部の掘立柱建物に同じ方位の規格がうかがえるが（『四街道市小屋ノ内遺跡（2）－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書IV－』第578図）、これは、台地整形区画の東端に南西方向にのびる台地があるのを基準にしたと考えられる。したがって、館ノ山遺跡の館造営の基準方位は、館が築かれた場所が工事着手前から北東側に比べて一段低い地形であり、境となる斜面がこの方位でのびていたためと考えてよかろう。ただ、北側の北ノ作遺跡の主郭で検出された掘立柱建物群を見ると、桁行方向の多くは南北であるが、SB-003・004は、桁行方向が北西－南東で、館ノ山遺跡の掘立柱建物の桁行方向と同じである。北ノ作遺跡の場合、掘立柱建物の向きは地形や土塁に左右されるように見えないので、意図的である可能性が高い。このことは、時期が同じである四街道市栗山の池ノ尻館跡¹⁾、千葉市若葉区の南屋敷遺跡²⁾・高品城跡³⁾の掘立柱建物においても桁行方向が同じであることからも言えようか。

館の場所が北側に比べて一段低い要因は、本来の自然地形によるのではなく、人為的な地形改変によるのであろう。自然地形であれば館の部分にも関東ローム層が存在するはずであるが、館の西側斜面では関東ローム層が失われていた（『報告書』4頁）。低くなった時期については、ここに縄文時代後期の遺物包含層が見られたこと（『報告書』18頁）から、その時期またはそれ以前であろう。縄文時代後期は、大規模な地形改変の例が各地の遺跡で知られている時期である。最も近いところでは、佐倉市井野長割遺跡の環状盛土遺構がある。館ノ山遺跡では東側の区域で当該時期の竪穴住居が2軒検出されており、想定される地形改変の時期として縄文時代後期の可能性が考えられる。その後、中世になって、台地整形を行い館が造られているが、最も深く削られているはずの北側の高台下でも、（4）の調査範囲の台地整形区画の北縁にかかる古墳時代後期の竪穴住居SI-159の掘り込みが25cm～30cm残っていたことから、その地形改変の程度は、当該時期の竪穴住居の平均的な深さから最大で1.5m程度で、数mも掘り下げるようなものではなかったと考えられる。

館の敷地範囲については、遺跡を南北に横切る切り通し状の道路があり、その東側まで広がるか否かである。道路西側の（4）の調査では標高 28 m 近くで掘立柱建物群を検出しているので、標高 27 m 近くまで掘り下げた東側地区でも掘立柱建物を検出できたはずで、東側地区には掘立柱建物はなかったと判断される。この点からは、館の敷地範囲は道路までであった可能性がある。また、道路東側の法面の上に土手状の高まりがあったことが等高線から読み取れ、この高まりが館の境であった可能性がある。一方、館の敷地の内外を区切った溝と思われる SD-012 (SD-020) の東端と SD-001 の西端が走行方向からつながっていた可能性もあり、そうであれば、館の敷地は道路の東側まで広がっていたこともあり得る。現状ではどちらと断定することは難しい。なお、南北に横切る道路の西側で検出された SX-001 とその南側の続きをと考えられる SD-024・025 は、位置と断面から上記の道路の法面が土砂で埋まったものと判断される。

なお、遺跡を南北に横切る道路が造られた時期は確定できないが、古墳時代後期の竪穴住居である SI-009・032 がこの道路に壊されているので、古墳時代後期以後で、明治 20 年作成の陸軍迅速図「下志津村」には、この道路が記載されているので、それ以前である。

館内の構造を見てみよう。区画から東・中央・西の 3 つの部分に分かれるようである。東部は、(4) の調査範囲である。SD-020 (SD-012) の溝によって中央部と区画される。中央の部分は空堀 SD-018 で西部と区画される。SD-013 は浅い溝で、地割りの溝ではなかろう。西部は、SD-018 から西側である。東部・中央部には、それぞれ 9 棟と 4 棟からなる掘立柱建物群があるが西部にはない。しかし、土坑群を見ると、西部北側の SX-019 を囲む土坑群は、掘立柱建物の柱穴の可能性があり（『報告書』第 133 図）、その東側には壁に沿って柱穴の可能性があるピットがめぐる方形竪穴遺構 SK-350 がある。この判断でよいならば、西部にも掘立柱建物が 1 棟あることになる。

同様に中央の土坑群を見ると、掘立柱建物群の西側にある SK-160 の南側の土坑群も、掘立柱建物の柱穴の可能性があろう。SX-012 周辺の土坑群も、掘立柱建物になりそうなものがある（『報告書』第 132 図）。東部と中央の掘立柱建物群の両方で一帯の土坑群を見ると、掘立柱建物の数が増える可能性がある。また、SB-004 の北側から西側のように、掘立柱建物に廂があった可能性を推測できる例がある。ただ、いずれの推定案でも、建物の桁行方向は、北西 - 南東の方向に揃っている。

上記のような掘立柱建物群の存在、中央と西部の間の空堀 SD-018 の存在、西側縁の土墨の存在、出土遺物から検出された一連の遺構群から、館ノ山遺跡は中世の館跡と考えられる。館とした場合、上記の遺構それぞれの機能は、どのように考えられるであろうか。

掘立柱建物群は、中央では敷地の東側と北側に集中し、南側から西側は空き地になっている。東側の掘立柱建物の桁行方向は北東 - 南西である。北側の掘立柱建物は南北 2 列であるが、南側の列の建物は桁行方向が上述の東側の建物と同じ北東 - 南西であるのに対して、北側の列の建物では桁行方向が北西 - 南東である。なお、南側の列の建物の桁行方向は、柱穴の想定の仕方によっては、90° 変わって北側の列と同じになる可能性があると思われ、SB-002 は北西方向に 3 間（柱穴で）のびる推測が可能である。床面積が最も大きいことから、この掘立柱建物が館の中心的な建物であろう。

SB-002 と SB-005 は、別の建物と報告されているが、両者の間の距離は、それぞれの建物の柱穴の間隔の短い方と変わらないので、繋がっていた可能性もある。また、SB-005 と西側の SB-004 は、その周囲の土坑とともに、桁行方向が北西 - 南東方向の横長の建物であったと推定することもできる。

館の東部では、掘立柱建物が東・北・西の三方で検出され、検出されないのは南東側だけである。そし



第25図 館ノ山遺跡中～近世の遺構図

て、その南東側は、一段下がった台地整形区画となっている。

東部の西側と中央の東側に掘立柱建物が並んで、東部と中央の行き来を遮るようであることから、東部と中央の掘立柱建物群は、一体ではなく、それぞれ別のまとまりであったことが推測される。これは東部と中央にそれぞれ井戸があることからも支持されよう。面積からは中央の方が主で東部の方が従のように思われる。掘立柱建物群のこうした様相は、県内の他の中世館跡では見られない。

南北方向に掘られた SD-018 の空堀を渡る橋の橋脚跡として、SB-003 が考えられる。柱穴の間隔が掘立柱建物よりも狭い。空堀に架けられた橋の遺構は、県内では、千葉市若葉区の高品城跡の 1 号堀で検出されている。幅 4.5 m の空堀の底面の地山を両側の底面より 0.8 m 前後高く方形に削り残し、その上面に 1 段の間隔で 2 基の柱穴を掘っていた。また、横芝光町の篠本城跡の 6 号堀でも、橋と推定される遺構が検出されている。高品城の例と似て、空堀の底の地山を両側の底より高く方形に削り残す。ただし、この削り残しの部分には、柱穴のような土坑・ピットではなく、この部分に面した空堀の脇に格子状に並ぶ土坑群が検出されている。『報告書』では橋と櫓門と推定している⁴⁾。どちらの例も、館ノ山遺跡の例よりも本格的と言えよう。

館跡敷地内の掘立柱建物がない空き地の規模を見てみると、中央の掘立柱建物群の南側は、SD-018 の東側までの南北 40 m、東西 50 m ほどである。これは農作業や人の集まりには十分な広さであろう。この部分の北側を掘立柱建物群と区切るように等高線に沿ってピットが並ぶが、柵跡であろうか。これに対して、東部の掘立柱建物群の南東側の空き地は、出入りの通路と考えられる SD-026 を除くと、その東側の南北 15 m、東西 15 m ほどで、中央と比較して狭いと言えよう。こうした空き地規模の違いからも、中央と東部の掘立柱建物群の間には性格の相違が推測される。

館の機能のうちの重要なものとして防御があろう。この点から見てみたい。防御施設の第一は堀と土塁になろう。館の立地する台地は、北東側を除いて谷津に囲まれ、谷津が堀の役割を果たす。谷津の水田面と館の敷地面の比高差は 10 m 以上ある。また館の東側と北側は、館の敷地より 5 m 以上高く、自然地形が土塁の役割を果たしている。西側と南側は、盛土して土塁を築いた痕跡が見られた。注目されるのは、空堀 SD-018 で、幅 5 m 前後、深さは 1 m 以上ある。これより西側の西部とした区画では、上記のように北側に掘立柱建物の存在が推測できるだけで、中央や東部のような確実な掘立柱建物がない。このことから、館の主要な部分は、中央と東部と思われる。そこで注目されるのが、遺跡を南北に横切る切り通し状の道路である。この道路は、先述のように明治 20 年以前にあったことが確認でき、北ノ作遺跡・古屋城跡が北側にある台地への南からの進入路になる。その入口を護る施設としてこの館跡が考えられる。館跡の北側には、堀とも言える谷津を挟んで、上記の台地への西側からの入口である尾根状の台地がある。ただ、この尾根状部分の標高が 32 m ほどであるのに対して、館ノ山遺跡北側の土塁とも言える自然地形の高まりは標高が 30 m ~ 32 m と同じかやや低く、防御に不利と思われるので、上記のような推測は控えるのが妥当であろうか。

このような立地と構造が館ノ山遺跡と大変よく似た館跡として、酒々井町本佐倉長勝寺脇館跡がある⁵⁾。長勝寺脇館跡の存続時期は 16 世紀を中心とするが、これを参考にすると、館ノ山遺跡を南北に横切る道路は、館の脇を通る道で、館の東側の縁を走ると考えられ、空堀 SD-018 には、その東側にも土塁があった可能性が高く、空堀の西側は副郭であったと考えることができる。また、道路東側の掘立柱建物がない部分も副郭と考えることができる。ただ、長勝寺脇館跡では周囲をめぐる斜面中段にある曲輪に相当する

遺構が、館ノ山遺跡にはない。

台地の斜面に立地することは防御の面から見ると不利と思われるが、館は領地経営の拠点でもあったはずで、水田面から見上げる格好になる位置に造営することで、水田を耕作する支配下の農民たちに対して威圧感を与えることをねらったということも考えられるであろう。中世館跡に防御機能が弱いと判断される例があり、それらは「屋敷」として「城館」とは区別でき、こうした「屋敷」こそが中世武士の一般的な居住の場ではなかったかとの指摘もある⁶⁾。館ノ山遺跡もこうした性格の館跡であったと考えられる。

注

- 1 1986『下総の国四街道地域の遺跡調査報告書－池ノ尻館址・戸崎城址・前広遺跡－』中野遺跡調査団
- 2 1996「南屋敷遺跡」『財団法人千葉市文化財調査協会年報』8 (財)千葉市文化財調査協会
- 3 1998「高品城跡」『千葉県の歴史 資料編 中世1 (考古資料)』千葉県
1997『高品城跡I』(財)千葉市文化財協会
1997『高品城跡II』(財)千葉市文化財協会
- 4 2000『千葉県匝瑳郡光町篠本城跡・城山遺跡－ひかり工業団地内埋蔵文化財調査報告2－』(財)東総文化財センター
- 5 1990『千葉県印旛郡酒々井町長勝寺脇館跡』(財)印旛郡文化財センター
下記の文献で上記の文献の記述について、遺構の年代等訂正がなされる。
1998「本佐倉長勝寺脇館跡」『千葉県の歴史 資料編 中世1 (考古資料)』千葉県
なお、千葉県の中世城館跡についての包括的な資料集として以下の文献がある。
1995『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書I－旧下総国地域－』千葉県教育委員会
1996『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書II－旧上総・安房国地域－』千葉県教育委員会
1998『千葉県の歴史 資料編 中世1 (考古資料)』千葉県
2000『千葉県文化財センター研究紀要20』(財)千葉県文化財センター
- 6 2009「東国における「館」・その虚像と原像」松岡 進『中世城郭研究』第23号

写 真 図 版



遺跡周辺航空写真（約1/10,000 昭和44年撮影）

図版2



遺跡全景

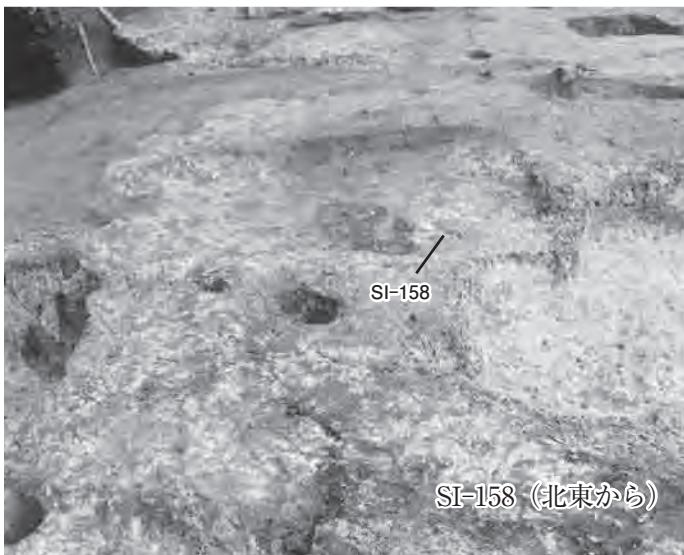
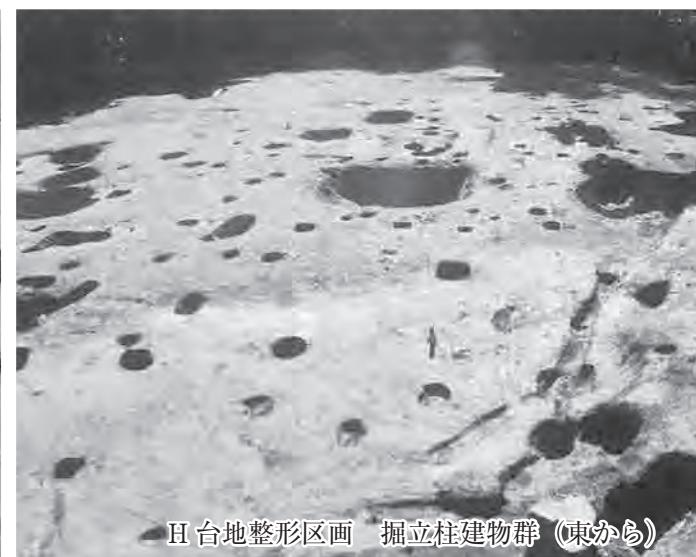


遺跡近景（北から）



図版4





図版 6



SK-407 (南から)



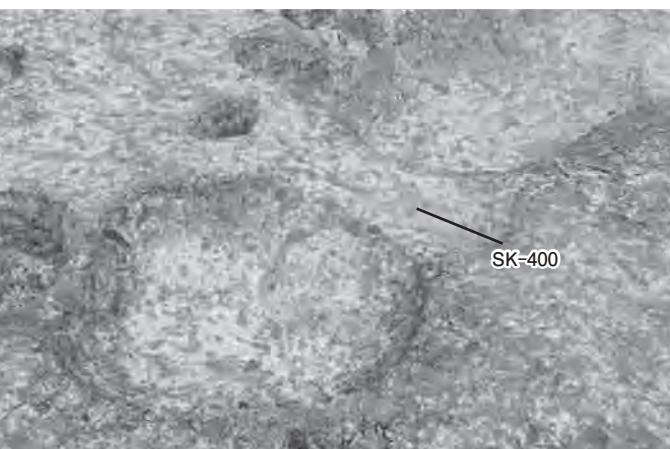
SK-365 (南西から)



SK-367 (西から)



SK-370 (南南西から)



SK-372

SK-372・400 (南西から)



SK-374 (南から)



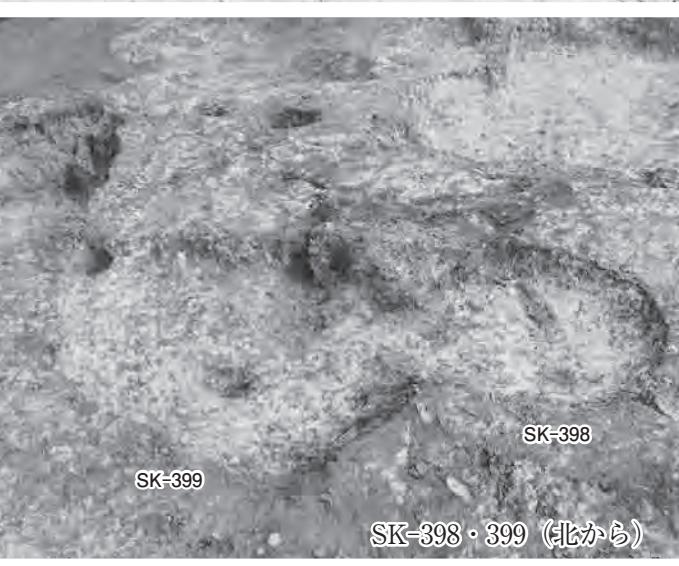
SK-375A・B (南から)

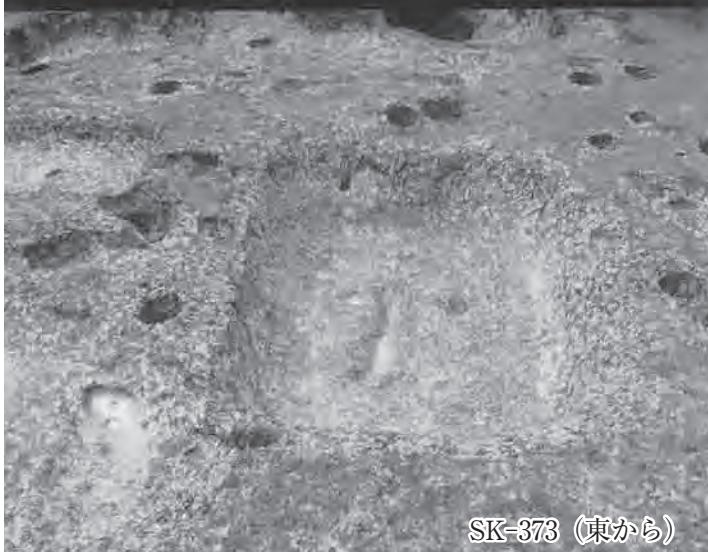


SK-376 (南西から)

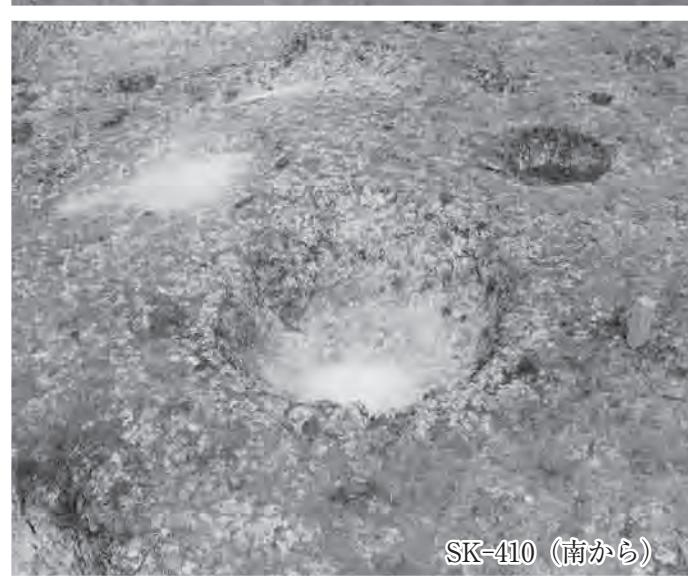


図版 8





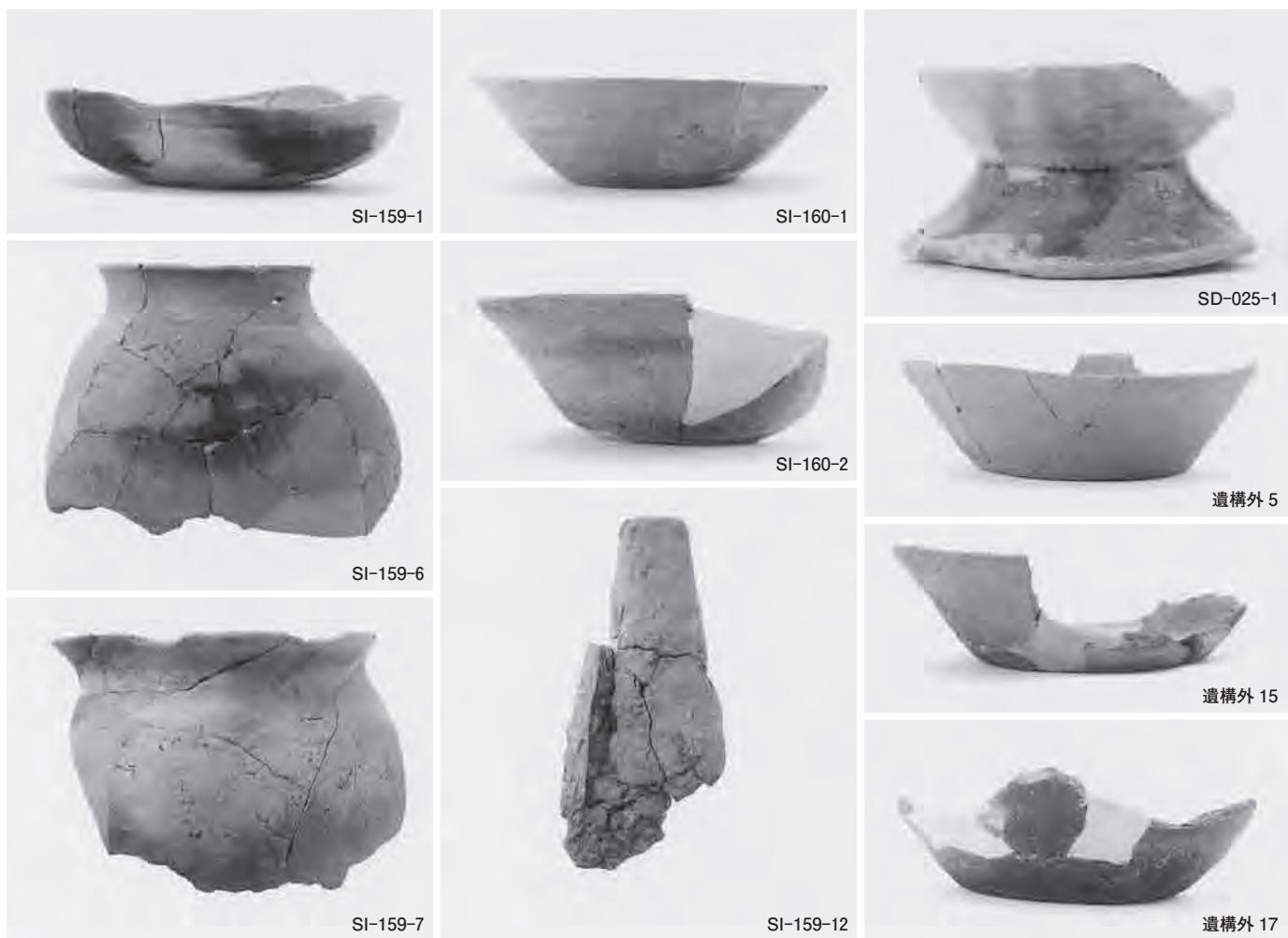
図版 10



SK-363

館ノ山遺跡(4)北東部(南西から)





縄文時代石器

砥石



出土遺物

報告書抄録

千葉県教育振興財団調査報告第 718 集

四街道市館ノ山遺跡（2）

－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書 XV －

平成 25 年 9 月 25 日発行

編 集 公益財団法人 千葉県教育振興財団
文化財センター

発 行 独立行政法人 都市再生機構
首都圏ニュータウン本部
東京都新宿区西新宿 6-5-1

公益財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡 809 番地の 2

印 刷 株式会社 エリート情報社[印刷出版局]
成田市東和田 415-10
